

The background is a vibrant blue gradient with abstract geometric patterns. On the left, there are complex, overlapping white and light blue lines that form a network-like structure, resembling a globe or a data visualization. The right side is a smoother, lighter blue gradient. The overall aesthetic is modern and technological.

# 研究は海を越え、 20年の軌跡



# 研究は海を越え、 20年の軌跡

---



# 海外発表促進助成制度 20周年を迎えて



公益財団法人 日本科学協会  
会長 高橋 正征

海外発表促進助成制度は、1988年度に始めた若手研究者を支援する笹川科学研究助成を受けた研究者（OB・OG）の方々から、海外での研究発表への強い支援要望があり、2001年度にスタートいたしました。新型コロナウイルスの流行により海外渡航が不可能だった2020～21年を除くと、毎年60～80人のOB・OGの方々が本助成を利用して海外で研究を発表され、20年間で1,335件を支援しました。

このところの情報・通信技術の急速な発達に伴って、海外研究者との連絡は実際に現地に赴かないでいとも簡単にできるようになりました。さらに新型コロナの流行で、オンライン形式での学会発表も増えています。ですから居ながらにして海外の情報を入手することは容易になりました。しかし、海外に行く必要がなくなったかということも必ずしもそうではありません。むしろ、オンラインで交流を深めるには事前に人と会い、現地の雰囲気を知っておくことが大変効果的です。例えば、オンラインでは研究内容の理解は深まりますが、会場の雰囲気や研究者の受け取り方などを感じ取ることは困難です。また、実際に現地を訪ね、研究者に直接会って話をすると、互いの理解が深まって親密な関係が築かれます。さらに、学会などでは見学会なども計画されることが多く、それらに参加すると研究環境や社会の雰囲気が体感できます。

私の経験では、ここ20年ほど、海外、特に欧米に行くと地球環境への危機感を強く感じ、日本に帰った後もその危機感を維持しようと強く心に決めるのですが、帰国して1週間もすると消えてしまいます。欧米では温暖化に代表される地球環境問題が社会にかなり浸透していて、「豚肉は二酸化炭素排出量が多いから食べない」といったような人々の積極的な行動にも表れています。しかし、日本では問題



は認識していても危機感がいたって弱く、そのため実際に具体的な行動をしている人は少ないのが現状です。日本ではいったん社会認知が進むと、問題解決に向かうエネルギーはすさまじくなりますが、社会認知に至るまでに長い時間がかかります。こうした日本での周回遅れを生み出す原因の一つが、多様な意見を育てる社会的仕組みの弱さにあるように思われ、その弱点を補う意味でも海外に行って現地の人々と会い雰囲気を感じてくることは大変有効だと思います。

この20年誌を作成するにあたり、事務局が整理してまとめた過去20年ほどの日本の研究の現状（本誌45～49頁）を見て、ある程度は予想していましたが数字を見て愕然としました。海外発表促進助成制度に関係することでは、このところ世界的に国際共著論文が多くなっている中で、日本の研究者の存在感が低下していることです。米国の国際共著論文の相手国として、日本は主要国中全8分野で8位なのに対し、中国は臨床医学の2位を除くとその他すべてで1位です。韓国は全体としての位置づけは低いのですが、材料科学2位、工学3位、化学4位、計算機・数学で6位と、特定分野で高い位置を占めています。改めて、日本の研究者は関係する外国人研究者と直接会う機会を今まで以上に持って相互の理解を深める必要性を感じます。

最近の効率よい情報通信技術を生かして科学研究を進めていくには、まず、実際に外国に出向いて向こうの研究者と親密な関係を築くことが効果的です。さらに、外国に出かけた際の現地で受ける様々な刺激は、研究を進めるための新しいアイデアを生み出す基になります。本海外発表促進助成制度の20周年を機に、制度の必要性の認識を新たにしました。笹川科学研究助成のOB・OGの皆さんが今まで以上に本制度を活用して素晴らしい研究成果を上げ世界に発信していただくことを期待します。

最後に、20年間変わらないご支援をいただいている日本財団に心から厚くお礼を申し上げます。

### 高橋 正征 (たかはし・まさゆき)

公益財団法人 日本科学協会 会長、公益社団法人 日本水産資源保護協会 会長、東京大学・高知大学名誉教授、理学博士  
1970年に東京教育大学理学研究科博士課程修了。専門は生物海洋学、生態学、地球環境科学、海洋深層水利用学。

# 研究者へのメッセージ



日本財団  
会長 笹川 陽平

日本科学協会  
会長 高橋 正征

**高橋正征** おかげさまで日本科学協会は、日本財団のご支援を受けて、笹川科学研究助成で若手の研究者を支援して、もう三十有余年になります。この研究助成を受けた OB や OG の方たちを対象にして、海外でのご自身の研究を発表していただくことに関して 1,300 名以上の方の参加費と旅費を支援して、昨年度で 20 年になりました。

**笹川陽平** それはずいぶん長い間、貢献いただきましたね。

**高橋** 日本で活躍している研究所の OG や OB の 4 人に 1 人が、海外で発表しているということになります。彼らの意見を聞くと、「生まれて初めて海外で発表した」ということで、それが研究生生活の自信と希望の糧になったと伺っています。笹川会長は、いろいろところで非常に示唆に富んだメッセージを発信されておりますので、ぜひ若手の研究者に向けて、科学の未来や未来の研究者について、何か糧になるようなメッセージをいただければと思います。



笹川会長は、社会貢献で世界的に活躍しておられ、海外にも頻繁に行っておられます。先日、会長のブログを拝見したところ、海外に行かれるときは、現地の民族衣装を手に入れて、それを身に着けてお会いになるということを知りました。そこまで準備されてから海外の方にお会いになると、ずいぶん違ったところまで見えてくるのではないかという気がします。一方、最近は通信環境も良くなり、居ながらにして海外の方たちといろいろな情報を交換できますが、「海外に行って現地を見て人に会う」ということの意味を、会長から少しお話しただけだと思いますが、いかがでしょうか。

**笹川** 私は、うちの若い人たちに「私たちの目は2つついていてではないか、この役割を考えたことがあるか」と、冗談めかして言うのですが、2つ目のひとつは望遠鏡、ひとつは顕微鏡ということです。20年、30年先を見る目と、足元の微細なこともきちんと見る、こういう両方の目が動いて初めて多角的、多面的に物事を見て分析する力が出てくるわけです。ただ、それだけでは不十分で、やはり現場には問題点と答えがある。したがって、冷暖房の効いたオフィスで報告文書を読んで発言しても、それは単に口と舌だけでもの言っているだけで、説得力がない。もちろん研究室で研究することは大事ですが、すべての学問は人類のためにあるわけですから、研究者も、やはり可能な限り、現場を見ることが重要であると、私はそんな気がしています。

かつて言われた、象牙の塔にこもって研究したものが人類の役に立つ時代はすでに終わっているわけです。何が人びとのためになるのかを考え、この国の人はどういう行動様式を持っているのか、ということまで勉強する、いわゆる専門外の勉強も大変大事ではないか、その上に立った専門研究という形になれば、もっと素晴らしいのではないかと思います。

**高橋** 「2つの目」というのは初めて伺いました。私もたまに海外に行くと、環境問題に対する意識がものすごく強くて、その意識がすごく伝わってくるのです。日本に戻って、この意識を維持しようと思っても、1週間もすると消えてしまうのです。これは一体何だろうかという感じがしますが、会長はそういうご経験はありますか。

**笹川** 2つの問題点をご指摘いただいたと思いますが、環境問題を国際的にするために日本財団は力を注いできたのです。いま、環境だ、やれ人権だなどと言っていますが、我われはもう30年前、40年前から取り組んでいるのです。環境問題は国際的には1972年に「ストックホルム宣言」が出されて、未来の地球を考えたときに、環境問題というものを世界の人に理解してもらわなければいけないということで、UNEP（国連環境計画）ができたのですが、なかなかこれがうまく機能しなかった。世界の人は関心がなかったのです。なんとか関心を持ってもらうために、やはりそういう環境で働いた人を世界的に表彰しようということで、「国連笹川環境賞」をつくったのです。最初の受賞者は、すでに亡くなりましたが、イタリアのペッチェイ博士という方で、環境問題の火ぶたを切られて。この賞ができたことで、いろいろなメディアが世界的に取り上げてくれることによって、環境問題が重要な問題という認識が広がったのです。そういう認識が広がって、いまのように意識が高まってきましたの

で、3～4年前に、その役目を果たしたとして、表彰をやめました。

また、いま海洋が問題になっていますが、これは35年前に、これから地球という存在のなかで、海洋の存在が人類にとって、生存に大きな問題を生じるのではないかと、予見していました。

当時は、海の世界の研究者が、世界のどこにいるかなんてさっぱりわからない。私が理事長をしていて、「海洋のニューズレター」（注：Ocean Newsletter）という冊子を作ったのですが、配布先がありませんでした。日本財団は「海洋基本法」の制定に積極的に取り組んできたのですが、いざ法律が制定したら、各省庁から専門家がわんさか訪ねてきて、こんなに海の問題を多角的にみている人がいるのだとわかったのです。いまやニューズレターは500号を超えましたが、多くの方がたが投稿してくれますし、読んでくれるようになってきました。「継続は力なり」と昔から日本の言葉にありますが、やはり地道に継続をしていくことが大事です。いま、日本財団では、140か国で1,500人、それぐらいの海洋の専門家のネットワークがありますから、2～3日あれば、世界中の専門家との間で問題意識が共有できるようなネットワークをつくっています。

教育の問題というのは、俗に100年かかる、3世代かかると言われていています。地道にやっていくこと以外に解決の方法はないのですが、地道にやるということを近代社会が嫌い始めたのです。すぐ成果を求めたがる。そういうことが最大の問題です。いま、日本の資本主義がここまで発達してきました。少し話はそれますが、会社でも、かつては安全管理が大変重要で、事故を起こしてはいけないということだった。いまや四半期に1回、企業の成績を発表しなければいけない。会社中心主義から株主中心主義に変わってきたので、株主からは、「利益を出せ、利益を出せ」と言われる。彼らから見ると、そういう安全管理の人たちは、「何もやらないのに給料だけもらって、あれは無駄ではないか」ということになる。私が若いときに働いていたところのビルの下で、ボイラーを触っている人たちが漫画を読んでいたのです。「君たち、仕事に漫画を読むのはまずいんじゃないのか」と言うと、「笹川さん、私たちが漫画を読んでいるということは、機械が機能しているということだ。私たちが忙しく働いていたら、機械が機能していないということになる」と。なるほどそういうものかと思いました。とてもいいことを彼らから学んだと思うのですが、そういう安全管理だとか、そういう人を全部外してきた。学問の世界でも、いまや基礎はなく応用科学、



すぐ社会の役に立つ、そういうものを強く求める時代になってきました。基礎のないところに家は建たないのに、建てた家のことばかり、いいとか悪いとか、デザインがいいとか、こういう議論になってきた。そのため、科学者の皆さんも、時代を読んだ研究をしたがるようになってきた。これは、非常に残念なことですし、やはり元に戻す必要があるのではないかと。現在の世の中に役立たない研究をすることが、いずれ役に立つことになるわけです。いま役に立つものは、すぐ駄目になってしまいます。本で言えば、料理の本と一緒に。電話帳と一緒に。番号が変わってしまったら、電話帳は何の役にも立たない。いまは電話帳もなくなってしまいましたが、やはり、いま役に立たないことを研究することが、将来役に立つ。いま役に立つことを研究するのは、それは研究のうちに入りません。日本科学協会が、そのような若い人たちのために、彼らの将来を考えて、研究の環境づくりのためにこつこつとやっていた提供しているのは、目に見えないことで素晴らしいことだと、私は思っています。研究者にしても、海外に行って学会で発表するというのはどういうことか、日本の学会と国際学会は全然違いますから。本当にオリンピックに出るような気持ちで行くのでしょうか、研究者の皆さんが、いい経験をしてくれば、帰国してから、それが栄養となって学問の道は更に進むのではないのでしょうか。

**高橋** 日本は、いままでどちらかというと万遍なくできる人、いわゆる秀才型の人を社会的に評価する傾向が強かった。それに対して、あることに秀でている、天才型というか、そのような人はあまり評価されなかった感じがあります。最近になって日本でもそのあたりの自覚が少しずつ見えて、その傾向が出てきています。日本科学協会では万遍なくできる人も支援しますが、そのような特徴を持った人も支援していきたいと思います。笹川会長もブログでいろいろとお書きになっていますが、いかがでしょうか。

**笹川** 高橋先生のおっしゃるとおりで、日本の良き伝統というものが、この現代になって、必ずしもそれが有効に作用しなくなった。たとえば、聖徳太子の「和を以て貴し」ということですから、あまり議論で先鋭化しないで、とにかく、みんなが「これならいいだろう」という平均点を求めるわけです。そうすると、大会社のどこの社長もそうですが、人格円満な人で富士山型の人を選ぶ。どこから見ても景色がいい。その時代はもうすでに終わっているのです。「和を以て貴し」ではイノベーションは起こりません。



これは農耕民族の欠点ではあるのですが、トップに立つ人は、すべて話し合いで、「和を以て貴し」でやろうとする。畑仕事でも1家族ではできませんが、村の長がいて、「今年は誰その田んぼから田植えを始める」といって始め、「ただし収穫のときは反対から行くが、これでいいか」というように相談して、みんな納得してやってきたわけです。現代社会はやはり、特に企業においては狩猟民族型の「俺が責任を持つ」「右に進むといたら全員が右を向いて進む」ようにしなければ、イノベーションは起こりません。

もうひとつは、自分のやっていることが社会でどんないい影響を与えているかを知りたいという若い人たちがいる。自分たちが直接社会と接して、自分たちのやったことが社会のために役立っているということを実感したい若い人たちがいっぱい出てきた。これはひとつの社会貢献というか、日本人の最もいいところで、助け合いの精神です。かつてはコミュニティがあって、助け合ってきたわけですが、それがいま、若い人たちの間にどんどん出てきています。これは素晴らしい傾向です。

年配になって、若者批判をするようになったら、もう仕事を辞めろというのが私の主義ですが、エジプトのスフィンクスの中にも、あるいは江戸時代の文献の中にも、「近ごろの若い者はどうもだらしがない」とか「出来が悪い」などという批判の文字があると言います。とんでもない話です。日本の未来はこれからの若者に懸かっています。すばらしい青年たちがいっぱい出てきています。これを、日本科学協会が学問的にエンカレッジしていただいて、地味ではあるけれども、こつこつ積み重ねてきていただいたというのは、いずれ必ず花が咲くものだと思うし、そのような、人を育てる仕事というのが実は一番楽しい仕事ではないかと、うらやましく思っています。

**高橋** 大変ですが、成果が出るのは、それが小さくても、すごくうれしいです。私も、「最近の若い者は」と思ったことがありますが、コンピューターが出てきてから、問題が起こったら若い人に助けてもらわなければならないんです。私たちの年代の連中も、それ以来、「若い人は」と言わなくなりました。だから、あのような新しい分野は若い人にしかできないとか、動かせないという感じがします。

**笹川** イノベーションの時代ですから、イノベーションは時代を先取りする仕事をやるわけですから、そこにはリスクも多いわけです。上に立つ人が、きちんとした覚悟を持って若い人たちに仕事をさせる、そのような仕組みにならない限り、世界的にみても、技術的にも、日本は相当な遅れをとってしまう。「日本の科学技術は大したものだ。ものづくりの力は大したものだ」という考えが、事実として残っていますが、一方で、たとえば大田区の中小企業が、アメリカのNASAで使っているロケットの先端の真球をつくっている、本当の真ん丸の真球は、いまだに機械ではなくて、手作業でなければできない、というのは、恐るべき話です。

これは、非常に限られた世界のものづくりで最先端を行っているわけですが、もっと社会に普遍的に活用されるような分野での世界的なイノベーションは、残念ながら日本では起こらない。ただ、小さなイノベーションは、若い人たちが懸命に努力しています。それは立派なことだと思います。



**高橋** 最後にひとつ、笹川会長にお伺いしたいと思います。いま、研究助成で若手を支援しているのですが、大きな問題は、いわゆる学位を取っても、就職する場所がないことなのです。それで、みんなポスドク（Postdoctoral Fellow）として時限で雇われて、いつ切られてしまうかわからない。それがやる気をもつごくそいでいるんです。いい案というのはなかなか出てこないと思いますが、会長は何かお考えはありますか。

**笹川** 国際機関で働くには、ドクターを持っていないとまったく評価の対象になりません。ドクターを持っているということが最低基準で、そのうえで仕事ができるかどうかなのに、ドクターを取って仕事がないというのはおかしい話です。私の考え違いかもしれませんが、問題は、やはりこれだけ社会が進歩してくると、ドクターを取るには何をやらなければならないか、ということで、非常に限られた小さな世界というか、あるいは、講座主義というか、上司の先生から「これをやったらどうか」というような下請けをやっているなかでドクターをとって、本来の自分に身に付いていないこと、形式的なドクターというと失礼ですが、実務とあまり関係のないところの落差みたいなものはないのでしょうか。

**高橋** それは、私も感じます。日本のドクターの研究は、どんどん、細かいところに突っ込んでいってしまうのです。幅広い視点というのが身に付いていないという問題があります。細かいことも大事だけれども、幅広い視点を持った人材を養うように、大学側も変えていかなければいけないと。

**笹川** 一般教養の重要性がちょっと無視されている感じがします。最近「リケジョ」という言葉も出てきて、それはそれで結構ですが、やはり幅広い人文科学の知識を身に付けたうえ



の理工系になってもらいたいものですね。やはり人間的な幅を持ったうえでの専門的研究が理想ではないでしょうか。

**高橋** 多分そのあたりが、日本の研究者の場合弱い、ということが問題だと思います。そういうことを日本科学協会として、機会があれば発信していきたいと改めて思いました。

**笹川** 海外の大学では、リベラルアーツ（一般教養）を大切にしていますね。アメリカの学部生は、確かほとんどが寮生活だと思いますが、世界中からいろいろな人が集まってきて、寮の中で喧々譁々の議論をします。お互いの国の成り立ちや歴史の違い、それに基づく考え方の違いなどをきちんと身に付けたうえでの専門知識ならば期待が持てると思います。そのあたりの構造的な改革というのは、なかなか日本では難しいのかもしれない。

**高橋** でも、発信していきたい思いです。

**笹川** 海外でドクターを取らせるようにしたほうがいいかもしれませんね。

**高橋** ドクターを比較すると、日本のほうが技術者的な感じが強いと思います。適当な言葉ではないかもしれませんが。

**笹川** そういうところはあると思います。私のせがれが、アメリカで建築の資格をとりまし

たが、日本へ帰ってくると、建築士という技術者なんですね。それで「僕は日本が嫌だから、アメリカに帰る」と言っ。アメリカで建築家というのは芸術家なんです。だから、扱いが全然違います。日本は技術屋であり尊敬の対象になっていないらしいです。

**高橋** 確かにそういう点があります。

**笹川** ダーウィンの進化論ではありませんけれども、時代とともにやる仕事は変化していかなければいけないと思います。変化には優れた人材が必要で、日本科学協会の役割はそういう人材を養成するための下働きという大変失礼な言い方ですけども、「教育の計は百年にあり」ということですから、これからも100年ぐらい頑張ってください、いずれ中から立派な人たちが輩出されることでしょう。

**高橋** 日本科学協会は、あと2～3年で100年を迎えます。

**笹川** すごいことですね。その間、進化を遂げてきたわけです。

**高橋** 今日は本当にありがとうございました。非常に示唆に富んだメッセージをいっぱいいただきました。研究者、あるいはこれから研究者を目指している人たちに希望と元気を与えるのではないかと思います。

**笹川** 若い人に勇気と自信を持ってもらって。また、彼らを激励する仕組みを、やはりつくってやらないと。研究者が狭い世界で生きていच्छるのは、ちょっと残念なことです。もっと広い世界のなかで自分の専門領域を研究していただくという体制をつくってあげれば、もっと違った形になってくるのではないかと思います。

**高橋** 今日はありがとうございました。

(対談の動画：[https://www.jss.or.jp/ikusei/oversea/20th\\_book.html](https://www.jss.or.jp/ikusei/oversea/20th_book.html))

## 笹川 陽平 (ささかわ・ようへい)

公益財団法人日本財団 会長

1939 (昭和14)年1月8日、東京生まれ。明治大学政治経済学部卒業。

現在、日本財団会長のほか、世界保健機関 (WHO) ハンセン病制圧大使、ハンセン病人権啓発大使 (日本政府)、ミャンマー国民和解担当日本政府代表ほかを務める。

40年以上にわたるハンセン病との闘いにおいては、世界的な制圧を目前に公衆衛生上だけでなく、人権問題にも目を向け、差別撤廃のための運動に力を注ぐ。

主な著書は、『この国、あの国 考えてほしい日本のかたち』(産経新聞社)、『世界のハンセン病がなくなる日 病気と差別への戦い』(明石書店)、『外務省の知らない世界の“素顔”』(産経新聞社)、『人間として生きてほしいから』(海竜社)、『若者よ、世界に翔け!』(PHP研究所)、『不可能を可能に 世界のハンセン病との闘い』(明石書店)、『隣人・中国人に言っておきたいこと』(PHP研究所)、『残心 世界のハンセン病を制圧する』(幻冬舎)、『地球を駆けるー世界のハンセン病の現場から』(工作舎)、『愛する祖国へ』(産経新聞出版)など。

海外発表促進助成制度 20 周年を迎えて 公益財団法人 日本科学協会 会長 高橋正征 .....	4
巻頭対談 研究者へのメッセージ 日本財団 会長 笹川陽平・日本科学協会 会長 高橋正征 .....	6
第一部 海外発表促進助成の概要 .....	15
第二部 海外発表促進助成者寄稿 .....	19
海と海洋深層水がつかない政策の縁 鈴木 千賀 .....	20
越境する「研究の場」 蘇 浩 .....	22
国際頭足類学会 (CIAC) に参加して受けた「刺激」 高原 英生 .....	24
国際交流の新しいステージ 松永 真由美 .....	26
イスキア島の思い出 2015 年国際ヒドロ虫学会ワークショップ参加記 依藤 実樹子 ....	28
第三部 海外発表促進助成の役割 .....	31
公益財団法人 日本科学協会 常務理事 石倉康弘 .....	32
資料編 .....	35
(1) 海外発表促進助成年度別助成状況一覧 .....	36
(2) 海外発表促進助成年度別助成状況一覧 (期別) .....	37
(3) 海外発表促進助成年度別助成状況一覧 (領域別) .....	39
(4) 海外研究発表支援状況一覧 (代表的集会名等) .....	40
(5) 海外発表促進助成採択者を対象としたアンケート調査 .....	42
(6) 日本国内の研究の現状と見えてくる問題点 .....	45
(7) 最近 5 年の海外発表促進助成採択者一覧 .....	50
(8) 日本科学協会の沿革・組織等 .....	62

## 第一部

---

# 海外発表促進助成の概要



# 海外発表促進助成

## 助成のいきさつ

海外発表促進助成は、これまでに「笹川科学研究助成」を受けた研究者（OB・OG）の研究成果を国際的に広め、若手研究者が海外での発表経験を積むことを目的として、その研究者が行う海外研究集会（学会等を含む）の研究成果発表に対し、渡航費（国際航空運賃・宿泊費）および参加費の一部を助成する制度です。OB・OGからのアンケート調査で多くの希望が寄せられて必要性が分

かり、笹川科学研究助成が単に一時期の研究支援だけでなく、若手研究者の研究活動を幅広い視点で継続的に支えることを目的としてつくられました。

本助成は平成13(2001)年度に開始し、令和2(2020)年度までの20年間に、1,335件の口頭もしくはポスターなどの研究発表に対して、総額約2億5千万円を助成しています。

## 制度概要

本制度では、現地やオンライン開催の海外研究集会で発表を行う予定がある、国内在住の笹川科学研究助成のOB・OGを対象としますが、助成年度に修士課程（博士前期課程）の大学院生として籍をおく方・日本学術振興会特別研究員（DC）として採用されている方・笹川科学研究助成を受ける方・同じ研究成果発表に対して他の助成団体から渡航費等の助成を重複して受ける方は、対象になりません。研究費の獲得が難しい若手研究者や、初めて本制度を受ける方は優遇されています。募集は研究発表の時期に応じて1年を4期に分けて募集（受付）し、本会の基準で選考し、期日までに助成を決定します。ただし、開催期間が年

度をまたぐ場合は、申請することができません。1件当たりの助成金額は、本会が認める必要総額の約8割で、概ね20万円です。助成金額の上限は、学会の規模や開催地域に関係なく30万円です。参考までに、表1に2020年度の募集期間などを示します。

発表資料等には、Sasakawa Grants for Science Fellows (SGSF) と記載していただくよう、お願いしております。

なお、最新の本助成の概要並びに申請書などは日本科学協会のWebサイト (<https://www.jss.or.jp/ikusei/oversea/>) で閲覧とダウンロードできます。

表1. 2020年度の海外発表促進助成の募集期間と決定期日

	研究発表期間	募集（受付）期間	決定期日
第1期	2020年4月1日から 2020年6月30日まで	2020年2月27日から 2020年3月10日まで	2020年3月25日
第2期	2020年7月1日から 2020年9月30日まで	2020年5月1日から 2020年5月15日まで	2020年6月15日
第3期	2020年10月1日から 2020年12月31日まで	2020年8月1日から 2020年8月15日まで	2020年9月15日
第4期	2021年1月1日から 2021年3月31日まで	2020年11月1日から 2020年11月15日まで	2020年12月15日

## 申請状況

本制度には年間100～150件の申請があり、採択は60～80件です。設立当初の早い段階から申請数は落ち着き、採択率も例年50%前後です。毎年、笹川科学研究助成のOB・OG数が増えています。研究を辞められる方もいらっしゃいますので、申請件数については安定しているようです。採択者の8～9割は初めて本助成を受ける方ですが、複数回採択されている方もいます。研究集会での発表課題と、笹川科学研究助成を受けた時の課題との関連性は問いません。

## 改善について

本制度の設立当初は、年度初め（4月～5月中旬）と年度末（2月中旬～3月）に開催される研究集会での発表は申請できませんでしたが、2004年度から、年度をまたぐ発表を除き1年を通して申請できるように改善しました。

1期～4期の予算配分については、前年度の2月に研究発表の予定についてアンケートをとり決定していましたが、例年申請の傾向に変化がないため、2015年度からは過去3年の申請数から当該年度の申請数を予測し、各期の予算配分を決定しています。隔年で開催される大きな学会がある年度は、若干の調整をしております。

笹川科学研究助成の電子化に伴い、本制度も2019年度よりメールを用いた電子ファイルでの申請受付を開始しました。同年12月から始まった新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により、海外研究集会のほとんどは中止または延期となり、辞退や申請件数が大幅に減ってしまいました。助成の対象となる研究集会には世界中から研究者が集まるため、過去にも2001年度には同時多発テロ、2003年度にはSARSの流行、2009年度には鳥インフルエンザが発生した際は、中止または延期する学会が増え、同様に辞退者が多く発生したことがあります。しかし、インターネット技術の発展により、オンラインでの開催という新しい方式での研究集会が出てきました。開催する側

各期の申請数の割合は、概ね1期30%、2期45%、3期20%、4期5%となっています。ただし、5年に1回開催されるInternational Chemical Congress of Pacific Basin Societiesなど大きな学会が開催される年度については、若干の変動があります。同学会やSociety for Neuroscience (SfN) Annual Meeting、American Geophysical Union (AGU) Fall Meetingなどは申請数が多くなっています。

の学術団体の負担も大きく、まだまだ少数ではありますが、2020年度よりオンライン開催の海外研究集会も助成対象といたしました。旅費交通費や移動時間が不要となるため、参加のハードルが低くなりますが、実際に現地に行って研究集会に参加するということは研究だけではなく、その国の研究環境や生活習慣などにも触れることができ、海外研究者との共同研究などの実現にも役立つと考え、現地での研究発表を今後も奨励していく予定です。

2021年度には、申請に必要な書類を見直し、申請時期と学会発表時期が離れているため入手が難しいと指摘のあった「海外研究集会での発表が認められていることを確認できる書類」を「予稿（発表要旨）を提出したことが確認できる書類」でも認めるように変更することで、より申請しやすい制度となるように改善をしました。

大学の財政難による研究費の減少から、研究者の研究環境が悪化し、特に海外での研究発表資金獲得の難しさが聞かれますが、そのような状況で、海外発表促進助成は、ますますその存在価値を増していくものと思います。

今後も、多くの方に利用していただけるよう、時代の流れに沿った制度となるよう工夫を重ねて参ります。  
(文責 豊田悠也)

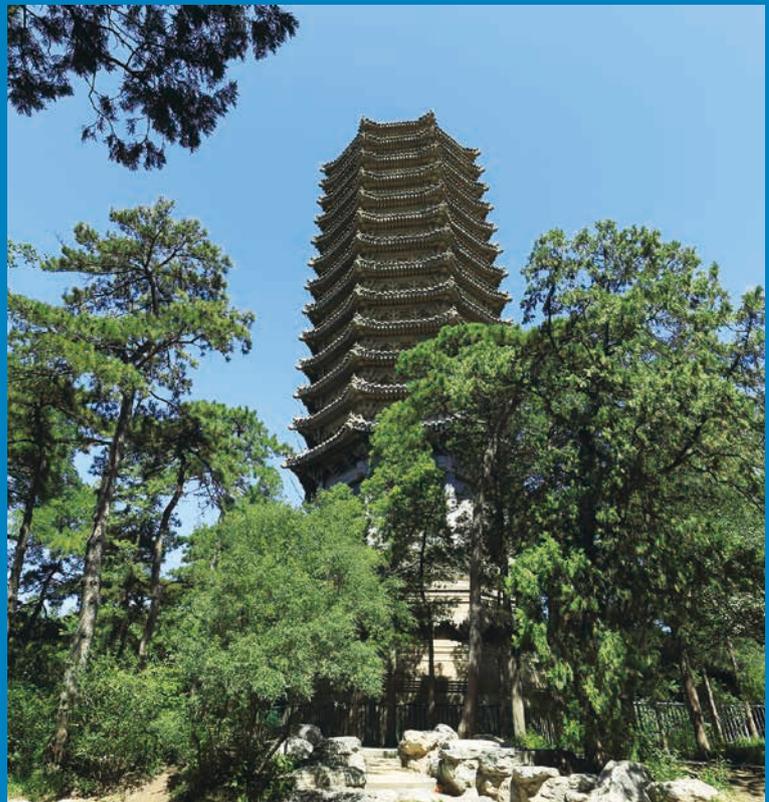


図 1. 海外発表促進助成の申請件数、採択件数、採択率の推移

## 第二部

---

# 海外発表促進助成者寄稿



# 海と海洋深層水が つないだ政策の縁

九州大学 科学技術イノベーション政策教育研究センター助教  
神戸大学自然科学系先端融合研究環助教（当時）

鈴木 千賀

私は、九州大学 科学技術イノベーション政策教育研究センター（文部科学省 SciREX 拠点：CSTIPS）で教員をしております。科学技術イノベーション政策の現場と並走し、様々な分析をしながら有効な政策立案を目指すのがこの SciREX です。分野の特性上、周囲は政界・政府関係府省・地方自治体、文部科学省、経済産業省、内閣府との関係が比較的強い人材が多いように思われますが、私自身も、職務執行の範囲でこれまで培って

きた党三役、国務大臣、全国の首長等とのネットワークを活用しつつ国の政策をより良い方向に向かわせるべく行政官らと力をあわせております。政治家、行政官とはまた違う特殊な役回りを担っております。

研究者・教育者としての私自身は、博士（環境学）を取得後、水圏生物環境学、政策評価の双方を専門として、現役大学院生・社会人を対象に水産政策をベースとした「科学技術イノベーション

政策分析」と「科学技術イノベーション政策立案演習」の講義を担当しています。キャリアとしては、水産庁補助調査員、21世紀 COE 研究員、日本学術振興会特別研究員のステップを経た後、高知大学（助教）・神戸大学（助教）そして、名古屋産業大学（准教授）にて研鑽を積んで参りました。日本科学協会の「海外発表促進助成」は神戸大学教員時代に採択いただき、それを原資としてトルコで開催された「EMECS10 MEDCOAST2013 Joint Conference」にて研究発表



兵庫県の井戸敏三知事（国際エメックスセンター理事長・当時）と筆者



「産学連携・地域連携活動に積極的に取り組む研究者のインセンティブ構造に関する研究」の書籍とプロジェクトサイト画面

を行うことができました。その後のステップにもつながる貴重な経験となり、初めてイスラム圏に出向き、その文化の違いを新鮮に感じることもできました。あらためて、会長はじめ選考していただいた日本科学協会の皆様に厚く御礼申し上げます。

私は、赤潮の研究者ですので、現地では、伊勢湾における赤潮と水質規制との関係性を明らかにした「Development of effective environmental management tools」の発表と意見交換を行い、また、研究者同士の交流に限らず、政策面では、これまでも業界誌での共著や著書にて研究紹介いただくなどご縁を頂戴してきた兵庫県の井戸敏三知事（(公財)国際エメックスセンター理事長・当時）とも交流の機会をいただきました。普段ではなかなか得ることができないであろう有意義かつ貴重な政策交流の場となりました。こういった水産海洋分野の研究活動やネットワークの醸成が今の水圏生物環境学者、政策評価学者である自分自身そのものを構成していることを実感しております。

現在関わっております文部科学省 SciREX においても、これまでもいくつかの政策プロジェクトを立ち上げて参りました。中でも、2019年に実施した「イノベーション・エコシステムの構成要件に関する調査・分析」は、COI（センターオ

ブイノベーション事業）を対象としてその評価指標・分析手法を開発することを目的とするものでした。私は海洋深層水事業およびその候補地として自らが選定した高知大学と琉球大学（室戸・久米島）へ行政官らとともにインタビューに伺いました。その時のご縁が現在、自身がプロジェクトリーダーをつとめる共進化実現プログラム（第IIフェーズ）「産学連携・地域連携活動に積極的に取り組む研究者のインセンティブ構造に関する研究」へとつながっております。研究者である中で、自分自身も IHI 代理店の取締役をつとめるなど社会への研究成果の還元は行って参りました。ただ、その多くは官学連携が主であった自分にとって本プロジェクトはさらなる飛躍の機会となっております。それだけでなく、英語での発表能力の向上や参加した他国の研究者の方々から、研究につながるアドバイス等を得ることができたりもしました。助成をいただいた日本科学協会の会長は、海洋深層水の利用分野で著名な研究者でもある高橋正征先生が務められており、コロナ禍を終えた後、お目にかかる機会があれば、いろいろお伺いしたいと楽しみにしています。今後とも末永きご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

# 越境する「研究の場」

浙江財経大学人文学院准教授  
関西大学大学院東アジア文化研究科（当時）

蘇 浩

関西大学大学院東アジア文化研究科（博士後期課程、文化交渉学専攻）に在籍した私は、日本科学協会海外発表促進助成の支援をいただいて、2019年5月にドイツのフリードリッヒ・アレクサンダー大学（エアランゲン・ニュルンベルク）へ赴き、「東アジア文化交渉学会 第11回国際学術大会」(The 11th Annual Meeting of Society for Cultural Interaction in East Asia: Moving Knowledges in East Asia and Beyond)

に参加しました。この大会が東アジア以外のドイツで開催されるのは、欧州中心主義から脱却した中国や日本、韓国の科学文化を「西洋の」あるいは「欧州の」科学文化と比較するためでもあり、国家や民族のパラダイムを生み出すようなことのない「知識史」に貢献する趣旨でもあると思います。

今大会の「東アジアの知識の変遷と超越」という年次大会テーマに応じて、私は、「敦煌学者羅振玉と書家山本竟山の交遊について—日本に所蔵



総会と筆者の発表の様子



何華珍教授と筆者。後ろは発表会場となったフリードリッヒ・アレクサンダー大学

する未発表の書簡と筆談を中心にー」(Dunhuang scholars Luo Zhenyu's contact with Japanese calligrapher Yamamoto Kyozan : centering on unpublished letters and written conversation in Japan) というテーマで発表しました。主に日本に所蔵されている新しい資料を利用して、EU 敦煌学と東アジアの書芸をめぐる交渉実態の研究に取り組んでいた私にとって、この海外発表はとても貴重な機会でした。特に発表内容に関連する西洋の先行研究は、資料を丁寧に収集・整理し、また、英語での発表に備えて、何度も練習しました。1 週間のドイツの滞在中は、フリードリッヒ・アレクサンダー大学の教育とその現場を見学できただけでなく、何よりも、日・中・欧の東西の学者に、発表内容の問題点を指摘されたり、意見を伺ったりすることができ、非常に貴重な経験となりました。こうした刺激は、研究視角に向かわせるうえで重要な要素であり、メリットとなります。

今回のように、ヨーロッパにおけるアジア地域を主とする文化交渉に関する発表は、中国人の私にとって、「他者」と「他者」のぶつかり合いとも言えるものです。関係史の研究では、多くの史料館を踏破するだけでなく、研究者の広い視野によって、新たなパラダイムや枠組み、重要な事実を提示することが大切です。この学会に参加して、一国史あるいは二国関係史としてよりも、ある広

域をめぐる文化などの多面的な現象としての分析、言い換えれば、越境する「研究の場」がいよいよ重要になると改めて実感することができました。また、今回の研究発表は個人の「我田引水」を越えて、シンポジウムの参加者一員として、東西間に知識の転換と移動に関与しており、グローバルネットワークを果たしたものであらうと思いました。

このドイツでの発表のもうひとつ大きな収穫は、「就職」の基礎を築くことができたことでした。同じ発表グループの中に、現在、私が勤めている大学の学部長兼研究科長の何華珍教授（元早稲田大学 PD、学振特別研究員）がいらっしやったのです。彼は学界の有名な先生で、若手研究者にも親切な方でした。何華珍教授が、私の発表に興味を持っていただいたことで、深い交流を行うことができたのです。それ以来、有益な学術交流が続いています。この4か月後、私は何華珍教授から、「博士号をとった後、大学へ就職しないか」と誘われ、幸いなことに専任講師の選考に合格、いまの学術研究が続いているのです。大学への就職後、私の研究テーマは、中国の科学研究費に選定されました。このようにして私が得たものは、日本科学協会海外発表促進助成から始まりました。改めて心から感謝の意を表したいと思います。

# 国際頭足類学会 (CIAC) に 参加して受けた「刺激」

一般財団法人 漁港漁場漁村総合研究所 第2 調査研究部 主任研究員  
一般財団法人函館国際水産・海洋都市推進機構 調査・研究部門 連携研究員主任 (当時)

高原 英生

2018年11月10日から、アメリカ合衆国フロリダ州セントピーターズバーグ市で開催されたCIAC2018に参加しました。CIACは、1983年に設立された世界の頭足類研究の進展、頭足類研究者間の国際ネットワーク、頭足類漁業などへのアドバイスを行う国際フォーラムです。このシン

ポジウムの開催頻度は3年に1回で、国際シンポジウムやワークショップ、出版物の刊行を行っています。専門分野は、頭足類の分類、生態、行動、発生、寄生虫、生理、養殖、漁獲方法と漁業資源など多岐にわたっています。今回のCIACでは、日本を含む30か国、約220人の研究者が参加し、2題の基調講演を

含む118題の口頭発表、124題のポスター発表が行われました。シンポジウムは、「系統分類学と生物地理学」のセッションから始まり、「水産業、資源量の見積りと管理」「生態系における生活史と役割」「繁殖」「遺伝と進化」「行動学」と続きました。また、基調講演ではAlison Sweeney(アリソン・スウィーニー)博士が頭足類の目を構成するタンパク質に関する発表を行いました。シンポジウムに参加して、世界各国で若手研究者が様々な分野で研究を行っ



シンポジウム参加者たちとの記念撮影



発表と会場の様子

ていたことに対して、強い刺激を受けました。従来の分類学、資源学に加え、生理学や遺伝・進化学、あるいは行動学の発表がこれまでに比べ多く、著しい進歩を感じました。これは、頭足類だけを対象とした研究者に加え、異なる分野の研究者が頭足類を研究対象生物として用いはじめたからかもしれません。

シンポジウムでは、2日目に筆頭著者としてスルメイカに関する研究のポスター発表を2件、共著者として1件行いました。近年、頭足類の成長は同じ種内でも経験する水温や餌などの環境条件によって大きく変化し、高い可塑性を示すことが分かってきています。しかしながら、これまでスルメイカの飼育実験の事例が少なく、それらが同様の可塑性を示すかは不明でした。そこで今回は、若齢期のスルメイカを様々な水温で長期飼育し、各水温区における平均日間摂餌量と平均成長量について検討した結果を発表しました。また、成長、成熟、寿命に水温が与える影響についても明らかにしました。若齢期のスルメイカを各水温区で飼育した結果、最適生息水温は20℃であると考えました。また、飼育開始1～2か月後（ふ化後半年程度）に野外では観察されないサイズで成熟に達しました。中でも高水温区の飼育個体ほど短期間に成熟したことから、水温と成熟の関連（高水温が成熟を促進する）を示すことができま

した。これらの結果から、スルメイカの成熟、寿命は、必ずしも日齢や体サイズに依存しておらず、同じ種内でも経験する水温などの環境条件によって大きく変化する可塑性があると考えられました。本研究で得られたスルメイカの成長の可塑性については、シンポジウム参加者と活発な議論を行うことができました。また、スルメイカの採集から飼育水温の管理、餌やりなど、飼育方法に関する質疑も多く受けました。

訪問したセントピーターズバーグ市は、タンパ湾に面した美しい海辺の街ですが、街全体が芸術の香りに包まれ「アートのみち」としても有名です。ヨーロッパ以外では最大のコレクションを誇るサルバドール・ダリの美術館もシンポジウム会場のすぐそばにありました。美術館にはダリの世界観を体験できるVRのコーナーがあり、これまでに体験したVRの中でも印象的な面白い体験ができました。息抜きに立ち寄ったつもりが、どっぷりとダリの世界にはまってしまいました。

このような経験も含め、今回のCIAC 2018への参加は、自身の研究に取り組む上でとても意義のある貴重な経験になりました。学会でお目にかかった研究者とは、いまでも連絡をとっています。このような機会を与えてくださった、日本科学協会海外発表促進助成事業に深く感謝いたします。

# 国際交流の新しいステージ

静岡大学学術院工学領域電気電子工学系列 准教授  
愛媛大学大学院理工学研究科電子情報工学専攻電気電子工学コース 講師（当時）

松永 真由美

新型コロナウイルス感染症の影響により、「いままで通り」の国際交流は困難な状況になっています。そこで、「これまで」と「これから」の国際交流について考えたいと思います。

国際交流といってもいろいろあります。私の場合は、大学や大学院留学、海外の研究機関で研究に従事する研修、共同研究、研究成果を広く認知してもらうための国際会議講演、国連関係の委員会、国際学会関係の委員会、国際プロジェクトのリーダーミーティングなどがあります。これまでは、国際線の飛行機に搭乗し、世界中の様々な国を訪れ、現地で言葉も文化も違う人々と実際に交流していました。これらが困難でもこれまで以上の交流を実現すること、重要なのは、これまで通りに戻ることを願うのではなく、たとえ災害などにより物理的な交流が途絶えても、国際的な交流は絶やさないと考えます。例えば、私が担っている国際交流の中には、個人の見識を高めるだけでなく、国連や国際プロジェクトの委員会の場で日本国の代表として専門的知識に裏付けられた発言が求められ、日本と世界とのコミュニケーションを担う役割があります。このような国際交流を途絶えさせれば、国際社会から孤立してしまいます。

国際交流を途絶えさせないためには、「国際感覚」を有する人材が重要です。今の私があるのは、日本科学協会の海外発表促進助成を受け、若い頃

から国際交流を現地で体感することができ、幼少期より培ってきた「国際感覚」をより豊かに成長させることができたからです。国際感覚とは、自分が知らない世界があること、そして、その世界を知り、その違いを理解した上で、共存していくことだと思います。コロナ禍における自粛生活を経験し、「with コロナ（コロナとの共存）」の必要性を理解している方々は、この国際感覚の重要性をご理解いただけたと思います。コロナ禍における自粛生活中は、他人の言動が自分の考えと違うことで憤慨し、違いを正そう（自分の考えに従わせよう）と躍起になる人々の姿が顕著になりました。海を越えた遙か彼方の国へ行ってもなお、文化の違いを受け入れられず、自分流を通す人がいます。しかしそれでは国際感覚は培えません。現地の文化を理解し、受け入れ、時として自分も溶け込んでみるのです。そうやって、国際感覚を成長させた上で、自分の文化も大切に、世界に理解してもらえるように努力する、そんな国際交流ができる人材が重要です。これまでは、海外へ送り出すことが人材育成の唯一の方法であると思われてきました。これからは、私をはじめとする国際感覚を既に有する国内人材の活用を重要視すべきです。その一方で、日本科学協会の海外発表促進助成が、これからも、勇気と希望をもって世界を目指す若者たちの背中を押し続けてくれることを願っています。



ジュネーブで開催された国際電気通信連合 (ITU) に日本代表として参加した時の様子

とはいえ、国際線の飛行機に搭乗し、他国に渡航するだけが国際交流ではありません。国際交流の場に参加するには、まず何かしらの研究や調査課題に取り組み、その結果をまとめ、先方（国際交流の場）で受け入れてもらう必要があります。もちろん、結果が出せない、先方に却下される、といったことになれば、メインイベントに参加できずに終わってしまいます。ここには、世界で認めてもらえる研究課題、そしてその成果とは？ 成果が出たとしても、文化の違う世界の人びとに、それらを理解してもらい、そして、価値を認めてもらえるにはどうすべきか？ を考える「国際交流」があります。これは、これからも変わらないでしょう。

では、現地へ行くことなしにどうやって国際交流のメインイベントを有意義なものにするのでしょうか。実際に、「バーチャル(オンライン)会議」により、交流の場は続けられています。とはいえ、バーチャル会議において、他国の参加者とどのように交流をするか、これは今のところチャレンジです。参加者の多い、国際会議の場では、進行役と講演者のみが音声と映像による発言権をもっており、聴講している参加者は、チャット機能を用いて質問することしかできないことが多いからです。どのようにチャットを書き込めば質問を拾い上げてもらえるのか。誰が発言しているのかをアピールするにはどうすればいいか。そして、参加

者同士の横のつながりをどうやってつくるのか。日々チャレンジです。リアルタイムで開催をしているバーチャル会議では、日本時間の日常に、別の時間帯の活動が入り込む、「仮想時差ぼけ」状態になります。そんな時は、思い切って、家族や仕事仲間に「私は〇〇国へ行ってきます！」と宣言し、生活時間を開催国に合わせて楽しみたいものです。

これからの新しい国際交流においては、SNSを活用した横のつながりも盛んになるでしょう。ResearchGateといったSNSでは、研究者同士の論文リプリントの交換だけでなく、内容について議論をする場もあります。国際会議の場にいた人だけでなく、世界中の同じ話題に関心のある人びとが、議論に積極的に参加できます。日本科学協会の海外発表促進助成でも最近制度が改善されて、オンライン学会も助成対象となると伺いました。

私が今も世界を飛び回り、学会発表、研究内容の講演、学生や企業在籍の研究者・技術者の指導ができているのも、学生時代の笹川科学研究助成制度とこの海外発表促進助成制度のおかげです。これからは、「現地へ行く交流」とともに、オンラインでの「新しい交流」の世界の広がりにも期待しています。

# イスキア島の思い出

## 2015年国際ヒドロ虫学会ワークショップ参加記

公益財団法人 海洋生物環境研究所実証試験場  
琉球大学理学部 非常勤講師 / 琉球大学熱帯生物圏研究センター ポスドク研究員(当時)

依藤 実樹子

日本科学協会の海外発表促進助成を受けて2015年6月、私はイタリアのナポリにあるイスキア島に渡り、国際ヒドロ虫学会のワークショップに参加しました。私の専門は海洋生物学で、研究対象のうち、「ヒドロ虫」という刺胞動物の仲間の研究成果を発表しました。世間でもっとも知名度のあるヒドロ虫は、ノーベル賞のきっかけになった「オワンクラゲ」でしょうか。一方、私が研究しているのは、大きさも形もタンポポの綿毛のような「エダウミヒドラ」の仲間です。生物の知名度もさることながら、研究者人口も少なく、日本には研究談話会がありますが、学会がな

く、国際学会でさえ参加者は100人に満たないほどです。しかし、少人数開催には利点もあります。ほとんどの参加者が同じホテルに滞在し、発表会場もホテル内、朝昼食にティータイム、観察会、学会主催の観光もほぼ全員一緒に過ごすため、いつでも参加者とコミュニケーションをとることができます。私にとって、学会期間中は、非常に濃い1週間となりました。参加者は20代の学生から80代のベテラン研究者まで、年齢も国籍も多様でした。そのような環境下で、朝から晩まで研究の話に浸りながら（もちろん雑談もしましたが）過ごしました。お名前のみ知っていた、また、



研究対象のエダウミヒドラの仲間（左）、採集を行ったアラゴン城（中）、海で採集した生物の観察会（右）



筆者の発表（左）、平野弥生博士の研究発表（右）

以前からお目にかかりたかった研究者とお話する機会ともなりました。

海に囲まれた島に滞在して、海洋生物学者がホテルに閉じこもっているはずはなく、観察会では皆で海に出ていったのですが、皆の海に出る格好を見て、それぞれの研究者が重きをおく事柄が見えて非常に面白い体験になりました。身軽な旅行優先で水着だけで泳ぐ人、快適に潜るためにウェットスーツなどの準備万端の人。私といえば、あわよくば生物採集するため、洗濯ネットに小さなプラスチック容器をいくつか入れたものをぶら下げて出かけました。風光明媚な場所で、海に突き出た小さな半島いっぱいにアラゴン城というお城が建っているそのすぐ下で、観光客に混じって研究者たちが海中に目を凝らして泳いだのです。結局私は、刺胞動物は採集できませんでしたが、他の動物を見つけて喜んでいたら、私の容器に目を留めた先生がいらっしゃいました。日本では安価に買える物ですが、フランス領の離島に暮らす先生には、とても便利に見えたようです。しきりに褒められたので、持参した分を先生に差し上げました。

私をこの学会に誘ってくださったのは、共同研究者で学生時代の指導者でもある平野弥生博士で、この時も同行してくださり、2人で2題の研究発表を行いました。学会参加に際し、博士から一方

ならぬ意気込みを感じたのですが、私はその理由を後に知ることになったのです。

私が最初に師事した平野義明先生は、弥生博士とともに、1988年にナポリ臨海実験所のイスキア支所に滞在され、弥生博士の師匠にあたる山田真弓先生も1957～1960年にナポリの実験所に滞在されています。弥生博士は、両先生を懐かしい場所へお連れしたいと、学会へのご同行を模索されていたのですが、結局叶いませんでした。

私たち2人の道中、ナポリ臨海実験所併設の水族館や、イスキア支所を訪れました。日本の臨海実験所にはない歴史や規模に圧倒されたのは当然ながら、平野先生夫妻の滞在時に臨海実験所に入入りしていた各国の研究者が学会に参加されており、先生方が若手研究者だった頃の思い出話を聞いたり、先生の当時のお住まいを見に行ったりしたこともとても感慨深いものでした。また、昭和天皇は、著名な日本人ヒドロ虫研究者の一人ですが、ご年配の先生に「私が初めて知り合った日本人はHirohito」とのお話をお伺いし、驚かされたりもしました。この学会中に見聞きしたことで、自分の研究の前に積み重ねられた、歴史を追体験しているように感じられ、単なる学会参加以上のものを得られたように思います。当時の学会参加ならびに渡航へのご支援に、改めて深謝いたします。



## 第三部

---

# 海外発表促進助成の 役割



# 海外発表促進助成の役割

公益財団法人 日本科学協会

常務理事 石倉康弘

近年、我が国の研究力の低下が指摘されています。過去 10 年にわたり、世界の主要国の論文数の増加率は 28 ~ 283% と伸ばしている一方で日本の増加率は 9% と停滞しています。また、世界的に国際共著論文が増加する中、主要国の国際共著の相手としてアジアでは中国と韓国存在感が高まる一方、日本の位置づけは低下してきていると言われています。博士課程入学者数の漸減傾向による研究者の人材不足や海外派遣研究者数が伸びていないように経験不足による研究の発展や深化が停滞していることも原因の一つでしょう。

若手研究者の皆さんには、積極的に次の扉を開き飛躍していただきたいと思います。この海外発表促進助成と笹川科学研究助成はそのような若い研究者の皆さんを応援する制度です。

初めて海外の集会で発表する方は、どのような学会で発表すればよいか、渡航費用、発表内容やまとめ方、申込の手続き、英語力の問題など、不安を感じることもあるかもしれません。しかし、そこをクリアして海外集会で発表をされた方は、単に研究発表して実績を作ったということ以外に必ず得るものも多くあるはずです。実際にこの制度を利用して海外の集会で発表してきた方のほとんどが、刺激や発見、気づきや反省があったと報告されています。研究内容に関することももちろんですが、研究の進め方、発表資料のまとめ方、発表の仕方、さらには学会運営や雰囲気についてなど様々なことに気づきがありますし、中には発表に自信が無かったが海外の研究者の発表を見て逆に自信を持てたという方もいます。また、学会のセッションメンバーでの新しい本の出版の話をもらい海外研究者との共同執筆による出版に参加する機会を得た方や、別の学会への参加を依頼された方、海外調査先の紹介を

受け研究内容の充実を図れた方など、自身の研究の具体的な発展につながっている方も少なくありません。

今回のアンケートでは、回答者の91.9%が海外での発表を行うモチベーションにつながったと回答され、海外発表の後押しとなっていることは非常にうれしいことです。また、海外研究者の友人、技術見学、留学の準備、海外の大学・研究レベルを体感、といった言葉もいただきました。この制度が海外での発表の機会提供という意味だけでなく研究者としてのステップアップやさらには地位確立のきっかけとして貢献できていると感じています。海外の集會に参加経験のある研究者の皆さんの言葉で印象的なのが「人とのつながり」に関することです。海外の研究者とつながりをもつことは自身の研究を発展させていくためにはとても重要であり効果的であると多くの研究者が感じていますし、実際に研究内容の発展や活動の幅が広がった方もいます。「人とのつながり」は現場に赴き対面しなければ築けるものではありません。過去にオックスフォード大学の著名な先生に留学時お世話になった経験のある方は、海外の学会に参加してその先生と名刺交換するところからつながり留学を受け入れてもらったそうですが、まずは海外の学会に参加したことが自身の研究の発展の大きなきっかけになったそうです。

少し前になりますが、2015年度に行った調査で海外での短期・中期的共同研究の希望が多くあり、2件実験的に試行しました。残念ながら費用や運用面の難しさから制度としての実現には至りませんでした。また、留学となると研究者自身もその時の所属先での仕事や帰国後のポストのことなど様々な問題があり、特に経験値の浅い若手研究者の方が海外留学というのは壁が高いかもしれません。しかし海外集會での発表はそのような問題は生じませんので、まずは海外の集會でご自身の研究を発表してみたいはいかがでしょうか。この海外発表促進助成制度は笹川科学研究助成を過去に受けられた方を対象にしていますので、限られた方だけが申請できる制度で採択率は50%程度と非常に高く利用しやすい制度だと思います。2018年度からは博士課程年齢も対象にすることとし、2018年度、2019年度ともに15名の博士課程の方にこの制度を利用していただきました。これは若手研究者に多くの経験を積んでもらうことを重視したためで、若手研究者が海外研究への第一歩を踏み出すきっかけとして積極的に本制度をご利用いただきたいと思います。

2020年度・2021年度は新型コロナウイルスの影響で本制度の利用者もほとんどいないのが現状ですが、オンライン開催の研究集會に参加する際の参加費も対象にしていますので、ぜひ活用していただきたいと思います。また、新型コロナが落ち着いた後もオンライン開催が以前よりも増えれば海外研究者と対面でコミュニケーションが取れる機会や人脈作り・ネットワーク作りの機会の必要性が高まります。この海外発表促進助成制度を、研究発表に限らず人脈作りや海外の研究機関の実情を知る機会として、今後、大いに活用していただくことを期待しています。さ

らに海外に限らず国内で開催される国際的な集会にも積極的に参加してもらえよう  
ような支援も検討して参ります。

本誌には、最近5年間の採択者一覧を掲載していますので、海外集会で発表を  
検討する際に役立てていただければ幸いです。ご本人の許可を得て実際に行かれた  
方をご紹介することも可能です。過去助成者の皆さんにもぜひご協力をお願いした  
いと思います。

さて、研究者の皆さんからは支援制度についてたくさんのご要望をたいており  
ます。研究者の支援として必要なことは数多くありますが、海外発表促進助成制度  
20年のこの機に海外集会への参加の機会を提供することの意義や役割を再認識す  
るとともに若手研究者の皆さんがさらなる飛躍を遂げられるために何ができるのか今  
後も検討していきたいと思ひます。研究助成制度には、審査・選考など多くの科学  
者の先生方に協力していただいております。研究者の声や先生方のお知恵をお借り  
しながら、充実した制度を模索していきたいと思ひております。



# 資料編

便名 FLIGHT NO.	航空会社 AIRLINE	便名 FLIGHT NO.	チェックイン CHK IN	ゲート GATE	備考 REMARKS
CX501	航空会社	JL7043	CD	95	搭乗終了
JL725	日本航空	KE5714	KLMOPQ	81	出発済み
JL957	大韓航空	JL5603	KLMOPQ	75	出発済み
MU272	日本航空	JL6801	C	87	出発済み
AY74	日本航空	AA8405	I	92	出発済み
JL10	アメリカン航空	AA8478	KLMOPQ	61	搭乗終了
JL12	アメリカン航空	MH9125	KLMOPQ	82	出発済み
JL805	マレーシア航空	AA8415	KLMOPQ	67A	搭乗終了
JL723	アメリカン航空	UL3355	KLMOPQ		出発済み
MH9117	スリランカ航空				
JL455	日本航空				
L407	アリエール				
L749					

## (資料 1) 海外発表促進助成年度別助成状況一覧

(単位：件及び千円)

年度	申請			採択		辞退	助成				予算
	件数	申請金額	平均金額	件数	率	件数	件数	申請金額	決定金額	平均決定金額	
2001年度	87	22,020	253	83	95%	25	58	14,600	8,999	155	12,000
2002年度	132	36,290	274	82	62%	3	79	22,730	13,417	169	13,000
2003年度	113	31,060	274	88	78%	9	79	21,580	13,665	172	13,000
2004年度	156	42,250	270	80	51%	3	77	20,720	12,268	159	13,000
2005年度	170	35,180	206	88	52%	5	83	16,130	13,270	159	13,000
2006年度	141	30,830	218	71	50%	3	68	14,230	12,259	180	12,300
2007年度	112	24,620	219	65	58%	3	62	13,590	12,376	199	12,300
2008年度	133	32,590	245	64	48%	5	59	14,310	12,449	211	12,300
2009年度	105	22,190	211	63	60%	2	61	13,020	12,303	201	12,300
2010年度	131	28,640	218	76	58%	5	71	14,920	13,313	187	13,000
2011年度	146	32,250	220	74	51%	6	68	15,420	14,354	211	14,000
2012年度	131	26,930	205	78	60%	1	77	14,314	14,124	183	14,000
2013年度	140	30,310	216	73	52%	2	71	14,890	14,230	200	14,000
2014年度	130	29,065	223	66	51%	2	64	14,622	13,981	218	14,000
2015年度	142	38,434	270	72	51%	3	69	18,949	15,946	231	14,000
2016年度	122	31,636	259	73	60%	1	72	18,622	16,603	230	14,000
2017年度	112	31,415	280	72	64%	4	68	18,886	15,318	225	14,000
2018年度	115	32,147	279	75	65%	3	72	18,879	14,021	194	14,000
2019年度	126	33,268	264	83	66%	9	74	19,215	14,750	199	14,000
2020年度	17	4,371	257	17	100%	14	3	367	307	102	14,000
合計	2,461	595,496	—	1,443	—	108	1,335	319,994	257,953	—	266,200

※ 2005年度～2014年度の申請金額は、対象経費総額の80%以内としている。

## (資料2) 海外発表促進助成年度別助成状況一覧(期別)

(単位：件及び千円)

年度	期	申請		採択		助成		
		件数	金額	採択件数	採択率	辞退件数	助成件数	決定金額 (除辞退)
2001年度	第1期	87	22,020	83	95.4%	▲25	58	8,999
2002年度	第1期	34	9,560	18	52.9%		18	3,192
	第2期	53	14,950	33	62.3%	▲2	31	5,159
	第3期	30	8,080	18	60.0%		18	3,131
	第4期	15	3,700	13	86.7%	▲1	12	1,935
2003年度	第1期	44	12,670	21	47.7%	▲4	17	2,783
	第2期	33	9,510	31	93.9%	▲4	27	4,390
	第3期	15	3,880	15	100.0%	▲1	14	2,869
	第4期	21	5,000	21	100.0%		21	3,623
2004年度	第1期	40	9,900	14	35.0%		14	2,176
	第2期	88	25,680	44	50.0%	▲1	43	7,003
	第3期	24	5,920	18	75.0%	▲2	16	2,488
	第4期	4	750	4	100.0%		4	601
2005年度	第1期	35	6,940	14	40.0%	▲2	12	1,913
	第2期	77	17,550	35	45.5%	▲1	34	5,783
	第3期	52	9,400	33	63.5%	▲2	31	4,476
	第4期	6	1,290	6	100.0%		6	1,098
2006年度	第1期	34	6,780	21	61.8%	▲1	20	3,490
	第2期	70	16,230	32	45.7%	▲1	31	5,910
	第3期	30	6,160	16	53.3%		16	2,597
	第4期	7	1,660	2	28.6%	▲1	1	262
2007年度	第1期	31	6,580	14	45.2%		14	2,487
	第2期	48	11,190	27	56.3%	▲1	26	5,637
	第3期	28	5,890	19	67.9%	▲2	17	3,329
	第4期	5	960	5	100.0%		5	923
2008年度	第1期	34	8,000	14	41.2%	▲1	13	2,691
	第2期	73	18,450	30	41.1%	▲3	27	5,646
	第3期	21	5,050	15	71.4%	▲1	14	3,022
	第4期	5	1,090	5	100.0%		5	1,090
2009年度	第1期	35	7,680	16	45.7%		16	3,318
	第2期	46	9,780	27	58.7%	▲1	26	5,239
	第3期	20	3,920	16	80.0%	▲1	15	2,946
	第4期	4	810	4	100.0%		4	800
2010年度	第1期	30	6,750	13	43.3%		13	2,582
	第2期	60	13,800	30	50.0%	▲4	26	5,111
	第3期	34	6,690	28	82.4%	▲1	27	4,866
	第4期	7	1,400	5	71.4%		5	754
2011年度	第1期	38	8,090	15	39.5%	▲5	10	1,848
	第2期	70	16,030	36	51.4%	▲1	35	7,903
	第3期	31	6,600	17	54.8%		17	3,486
	第4期	7	1,530	6	85.7%		6	1,117

2012 年度	第 1 期	38	7,650	19	50.0%		19	3,352
	第 2 期	60	13,390	33	55.0%		33	6,720
	第 3 期	29	5,150	22	75.9%	▲ 1	21	3,325
	第 4 期	4	740	4	100.0%		4	727
2013 年度	第 1 期	37	7,800	19	51.4%		19	3,843
	第 2 期	63	15,160	27	42.9%	▲ 2	25	5,523
	第 3 期	33	6,180	23	69.7%		23	4,214
	第 4 期	7	1,170	4	57.1%		4	650
2014 年度	第 1 期	37	7,820	23	62.2%		23	4,844
	第 2 期	62	14,343	27	43.5%	▲ 1	26	6,012
	第 3 期	26	5,682	13	50.0%		13	2,722
	第 4 期	5	1,220	3	60.0%	▲ 1	2	403
2015 年度	第 1 期	45	12,056	18	40.0%	▲ 1	17	3,695
	第 2 期	51	14,009	31	60.8%	▲ 2	29	7,142
	第 3 期	38	10,241	19	50.0%		19	4,181
	第 4 期	8	2,128	4	50.0%		4	928
2016 年度	第 1 期	37	9,996	21	56.8%	▲ 1	20	3,972
	第 2 期	57	15,081	31	54.4%		31	8,503
	第 3 期	23	5,342	16	69.6%		16	3,057
	第 4 期	5	1,217	5	100.0%		5	1,071
2017 年度	第 1 期	35	9,264	24	68.6%	▲ 2	22	5,228
	第 2 期	52	15,762	29	55.8%	▲ 1	28	6,402
	第 3 期	19	4,512	13	68.4%	▲ 1	12	2,218
	第 4 期	6	1,877	6	100.0%		6	1,470
2018 年度	第 1 期	26	7,195	17	65.4%	▲ 2	15	3,070
	第 2 期	60	17,753	37	61.7%	▲ 1	36	7,697
	第 3 期	26	6,539	18	69.2%		18	2,744
	第 4 期	3	660	3	100.0%		3	510
2019 年度	第 1 期	32	8,623	22	68.8%		22	4,505
	第 2 期	62	17,254	36	58.1%	▲ 2	34	7,195
	第 3 期	24	5,553	18	75.0%	▲ 2	16	2,731
	第 4 期	8	1,838	7	87.5%	▲ 5	2	319
2020 年度	第 1 期	13	3,527	13	100.0%	▲ 12	1	240
	第 2 期	1	374	1	100.0%	▲ 1	0	0
	第 3 期	3	470	3	100.0%	▲ 1	2	67
	第 4 期	0	0	0	0.0%		0	0
合 計		2,461	595,496	1,443	—	▲ 108	1,335	257,953

### (資料3) 海外発表促進助成年度別助成状況一覧(領域別)

(上段：申請件数、下段：採択件数)

年 度	分野別件数 (辞退含む)							
	人社	数物	化学	生物	複合	海洋	実践	合計
2001年度	11	26	13	20	10	6	1	87
	10	24	13	20	10	5	1	83
2002年度	13	29	24	36	22	6	2	132
	10	17	14	20	15	4	2	82
2003年度	7	26	20	24	21	13	2	113
	6	20	15	19	15	11	2	88
2004年度	15	41	23	32	33	10	2	156
	6	19	11	15	23	5	1	80
2005年度	10	28	40	45	28	16	3	170
	5	12	26	24	14	6	1	88
2006年度	12	20	28	32	21	22	6	141
	9	5	13	19	9	13	3	71
2007年度	15	22	9	23	21	21	1	112
	8	9	7	12	9	19	1	65
2008年度	15	20	16	36	18	22	6	133
	5	6	7	21	11	12	2	64
2009年度	9	9	15	30	26	15	1	105
	7	6	4	22	13	10	1	63
2010年度	14	15	26	32	24	14	6	131
	10	7	17	21	13	4	4	76
2011年度	17	17	19	33	36	20	4	146
	10	9	8	15	15	15	2	74
2012年度	18	20	20	34	21	14	4	131
	14	12	12	18	11	8	3	78
2013年度	17	19	20	33	22	21	8	140
	13	6	9	17	14	10	4	73
2014年度	22	13	22	25	19	17	12	130
	11	9	9	13	11	9	4	66
2015年度	20	22	31	21	24	21	3	142
	10	8	15	16	11	12	0	72
2016年度	9	19	18	29	24	17	6	122
	9	14	8	17	12	11	2	73
2017年度	15	13	25	21	28	6	4	112
	12	7	13	15	18	3	4	72
2018年度	20	15	20	22	20	12	6	115
	14	9	11	17	15	9	0	75
2019年度	22	20	20	25	18	15	6	126
	17	12	13	17	11	10	3	83
2020年度	2	1	1	2	5	5	1	17
	2	1	1	2	5	5	1	17
合 計	283	395	410	555	441	293	84	2,461
	188	212	226	340	255	181	41	1,443

	人社	数物	化学	生物	複合	海洋	実践	合計
笹川科学研究助成 過去助成者数 (件)	1,433	1,153	1,362	2,775	1,331	1,256	581	9,891
うち海外発表促進助成 申請割合	20%	34%	30%	20%	33%	23%	14%	25%
海外発表促進助成 採択割合	66%	54%	55%	61%	58%	62%	49%	59%

## (資料 4) 海外研究発表支援状況一覧 (代表的集会名等)

年度	学会名	開催国	件数
2001	Asian Chromosome Colloquium	中国	3
	International Conference on Fracture	アメリカ	2
	Society for Neuroscience (SfN) Annual Meeting	アメリカ	2
2002	Society for Neuroscience (SfN) Annual Meeting	アメリカ	4
	American Geophysical Union (AGU) Fall Meeting	アメリカ	4
	Materials Research Society (MRS) Fall Meeting	アメリカ	2
	International Congress of Ecology	韓国	2
2003	International Symposium on Biotechnology, Metal complexes and Catalysis	中国	2
	American Geophysical Union (AGU) Fall Meeting	アメリカ	6
	Materials Research Society (MRS) Fall Meeting	アメリカ	3
	Annual Meeting of the American Society for Cell Biology	アメリカ	3
	International C. elegans Meeting	アメリカ	2
2004	Annual Meeting of the Society of Vertebrate Paleontology	アメリカ	2
	Society for Neuroscience (SfN) Annual Meeting	アメリカ	2
	China-Japan Joint Symposium on Environmental Chemistry	中国	2
2005	International Congress of Photosynthesis	カナダ	2
	International Chemical Congress of Pacific Basin Societies	アメリカ	18
	International Botanical Congress	オーストラリア	4
	Society for Neuroscience (SfN) Annual Meeting	アメリカ	4
	International Conference on Bear Research and Management	イタリア	2
2006	International Symposium on Biotechnology, Metal Complexes and Catalysis	中国	2
	World Congress of Emulsion	フランス	2
	International Horticultural Congress & Exhibition	韓国	2
2007	International Horticultral Congress & Exhibition	韓国	2
	American Geophysical Union (AGU) Fall Meeting	アメリカ	2
	Symposium of the International Geological Correlation Programme Geological Anatomy of East and South Asia	インド	2
	International Conference and Exhibition Materials and Austceram	アメリカ	2
2008	Society for Neuroscience (SfN) Annual Meeting	アメリカ	2
	International Congress of Entomology	南アフリカ	2
	International Organization of Palaeobotany Conference	ドイツ	2
	Sixth World Archaeological Congress	アイルランド	2
2009	ASLO Aquatic Sciences Meeting	アメリカ	2
	Society for Neuroscience (SfN) Annual Meeting	アメリカ	4
	Ocean Sciences Meeting	アメリカ	2
	American College of Sports Medicine	アメリカ	2
	European Geosciences Union General Assembly	オーストリア	2
	International Congress of Ecology	オーストラリア	2
2010	IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems	アメリカ	2
	International Chemical Congress of Pacific Basin Societies	アメリカ	7
	Society for Neuroscience (SfN) Annual Meeting	アメリカ	3
	World Congress of Basic and Clinical Pharmacology	デンマーク	2
General Meeting of the International Mineralogical Association	ハンガリー	2	

2011	European College of Sport Science	イギリス	5
	International Botanical Congress	オーストラリア	2
2012	International Coral Reef Symposium	オーストラリア	2
	International Symposium on the Ocean in a High-CO2 World	アメリカ	2
	American Chemical Society National Meeting	アメリカ	2
	Society for Neuroscience (SfN) Annual Meeting	アメリカ	2
2013	Biennial Conference on the Biology of Marine Mammals	ニュージーランド	3
	Goldschmidt Conference	イタリア	3
	Annual Congress of the European College of Sport Science	スペイン	2
	Society for American Archaeology	アメリカ	2
2014	Congress of the International Society of Ethnobiology	ブータン	2
	International Congress of Applied Psychology Scientific Programme Committee	フランス	2
	American Geophysical Union (AGU) Fall Meeting	アメリカ	2
2015	International Chemical Congress of Pacific Basin Societies	アメリカ	7
	Annual Larval Fish Conference	オーストリア	2
	Goldschmidt	チェコ	2
2016	International Coral Reef Symposium	アメリカ	4
	International Congress of Entomology	アメリカ	4
	Society for Neuroscience (SfN) Annual Meeting	アメリカ	3
	Annual Congress of the European College of Sport Science	オーストリア	2
	International Symposium on Pure & Applied Chemistry	マレーシア	2
2017	Annual Meeting of American College of Sports Medicine	アメリカ	3
	Annual Meeting of the Society of Vertebrate Paleontology	カナダ	3
	International Association of Volcanology and Chemistry of the Earth's Interior (IAVCEI) 2017 Scientific Assembly	アメリカ	2
	International Society of Heterocyclic Chemistry (ISHC) Congress	ドイツ	2
2018	Asia Oceania Geosciences Society (AOGS) Annual Meeting	アメリカ	3
	Gordon Research Seminar and Gordon Research Conference on Biocatalysis	アメリカ	2
	World Congress for Middle Eastern Studies (WOCMES)	スペイン	2
	International Symposium on Microbial Ecology (ISME)	ドイツ	2
	International Congress on Pure & Applied Chemistry	マレーシア	2
	Society for Neuroscience (SfN) Annual Meeting	アメリカ	2
2019	World Marine Mammal Conference	スペイン	4
	A Joint Meeting of the Annual Conference of the Animal Behavior Society and the International Ethological Conference	アメリカ	2
	Congress of the International Union for Quaternary Research (INQUA)	アイルランド	2
	International Symposium on Glycoconjugates	イタリア	2
	Asian Marine Biology Symposium	台湾	2
2020	American Geophysical Union (AGU) Fall Meeting	アメリカ	2

## (資料5) 海外発表促進助成採択者を対象としたアンケート調査

### 概要

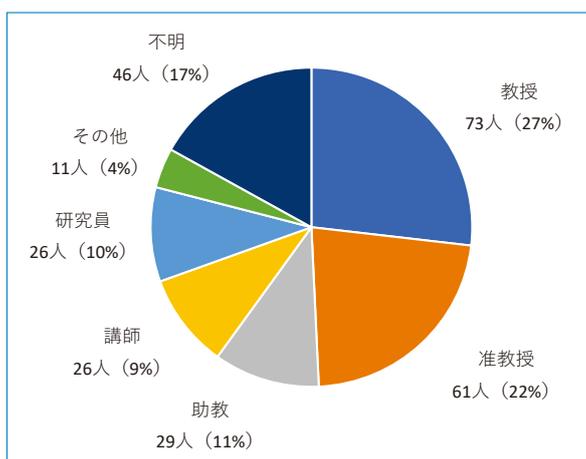
2021年6月に、海外発表促進助成を1回以上受けたことがある1,335件のうち、メールアドレスを把握している929件(約70%)に対してアンケート依頼を行い、272件から回答を得ました(回収率約29%)。アンケート調査結果の一部を以下に紹介します。

笹川科学研究助成の過去全助成者9,891件のうちメールアドレスを把握している割合は約47%となっていることから、海外発表促進助成の助成者とは特に深いつながりができていることが分かります。

### アンケート結果

#### ●現在の研究状況について

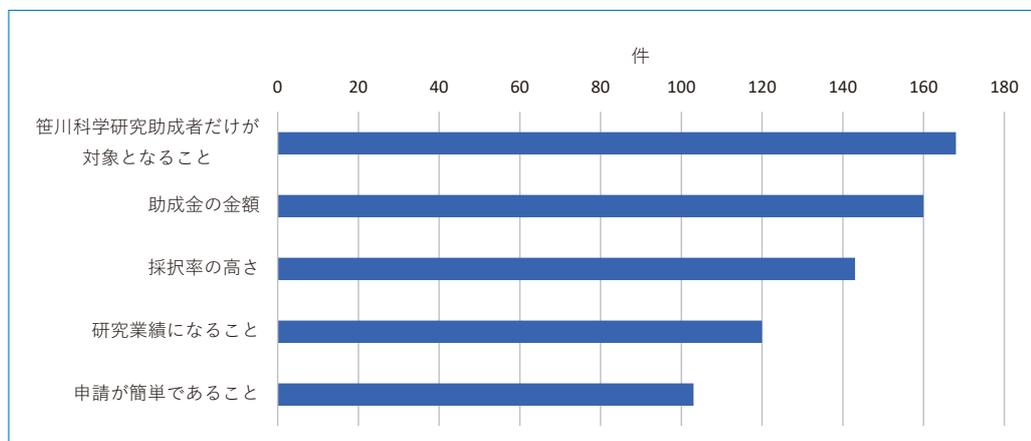
回答者のうち、99.6%は研究を続けており、所属先での役職は右記の通りとなりました。



資図 5-1

#### ●申請動機について

回答者のうち91.9%の方が海外での発表を行うモチベーションにつながったと回答しており、下記のような点が動機付けになったと回答がありました。

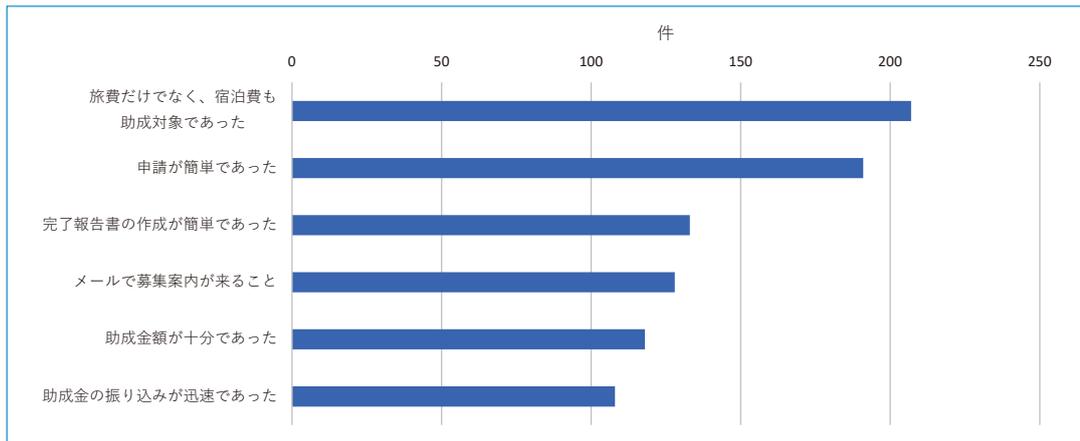


資図 5-2

### ●助成を受けての感想について

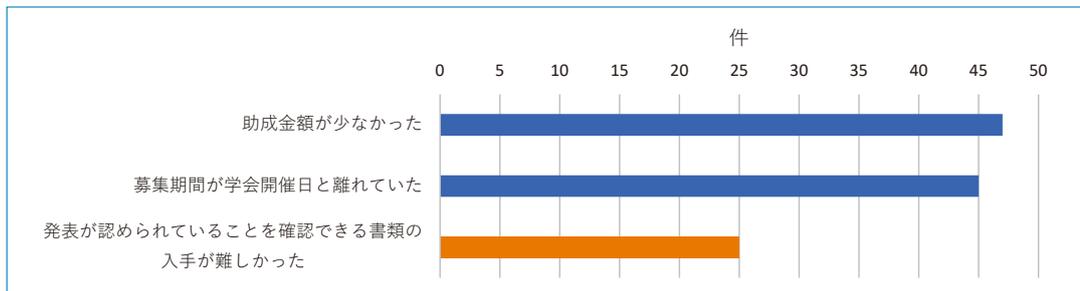
約99%の方が満足したと回答しており、下記のような意見が多くありました。

#### 満足点について



資図 5-3

#### 不満点について



資図 5-4

満足点としては、旅費だけでなく宿泊費も助成対象であることや、申請や完了報告書が簡単であることをほとんどの方が挙げていました。また、メールでの募集案内が来ることや振り込みが迅速であったことなど、事務手続き等についての満足度も高いことが分かりました。

不満点としては、「募集期間と開催日が離れていた」、「発表が認められている書類の入手が難しかった」という声が多くありました。1年を4期に分けて募集を行うため、最大3か月前に申請を行わなくてはならないことが原因と推測されますが、さらに細かく募集期間を設定することは制度の運用上難しいと考えられます。その中でも特

に「発表が認められていることを確認できる書類」の入手が難しいとの意見が多くありました。こちらについては、2021年度から「研究集会へ予稿（発表要旨）を提出したことが確認できる書類」でも申請を認めるように、制度を既に改善して対応しています。

助成金額が十分であったという声と、不足していたという両極端な意見がありました。30万円を上限としているため、アメリカなどへの交通費が高額となり30万円を超えてしまう場合は不足していると感じ、アジア圏などの近場の海外研究集会では交通費も30万円以下となるため、十分な助成金額であると感じていると推測されます。

### ●再度申請について

再度申請を考えるかという質問に対し、約74%の方が「はい」と回答されました。「いいえ」と答えた方のうち、最も多い回答は「予算がある(約39%)」ということでしたが、「若手を優先し

て助成して欲しい(約34%)」という旨の意見も多くあり、笹川科学研究助成を受けて縦のつながりが広がっていることが分かってきました。

### ●海外研究集会中に開催された他のイベントについて

海外研究集会中に開催された「大学見学会」や「フィールドワーク」等のイベントに参加したかという質問に対し、約22%の方が参加したと回答しました。様々なイベントが開催されており、開催国の自然景勝地を回るツアーやエクスカージョン、BBQ、ディスコ大会、生物採集や化石採集を伴う巡検、マラソン、水族館・科学館・工場見学等がありました。イベントに参加したことのメリットとして、海外の研究者の友人ができた、技術を見学することができた、採集に使用する道

具が違うことが分かった、留学の準備ができた、滞在国の理解がうまれた、海外の大学・研究のレベルを体感できた、生活の事情を垣間見ることができた、実験室・研究環境の整備の参考となった、日本のシステムと比較ができたなど、様々な学びがあったと回答がありました。今後オンラインでの研究集会が増えることも考えられますが、現地に行くことでしか感じられないことも多くありますので、今後も現地での発表への助成を推奨したいと思います。

### ●助成制度への要望について

論文校閲費や投稿費、研究書籍出版の助成といった、研究成果のアウトプットに対する支援を求める声が多くありました。現地へ行き研究集会へ参加することは重要と考えていますが、今後オ

ンラインでの開催が増え、海外研究集会での発表と論文での発表の差がなくなってくることも考えられるため、状況を見極めながら柔軟に制度を運用したいと考えています。

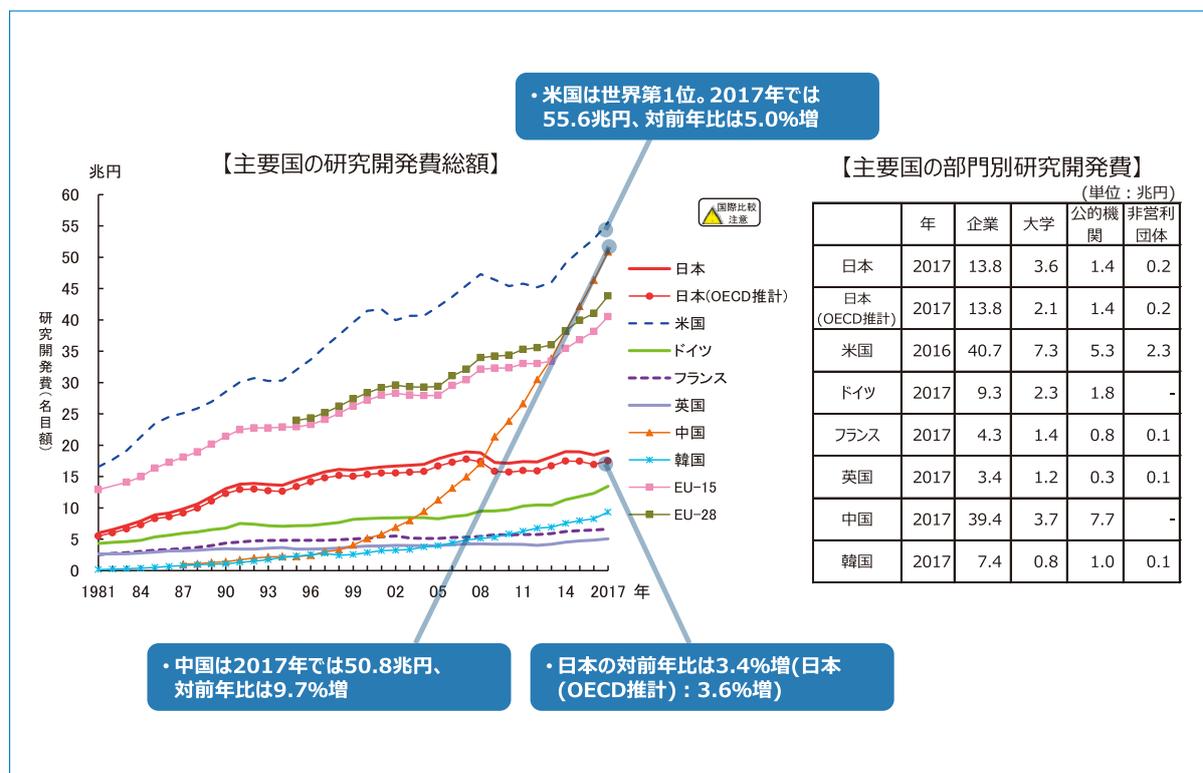
## (資料 6) 日本国内の研究の現状と見えてくる問題点

日本科学協会は1988年から、35歳以下の大学院生を中心とした若手研究者を対象に研究助成を行い、2001年からは研究助成を受けたOB・OGの研究成果を国際的に広めることを目的として、海外での研究発表や交流を支援するための海外発表促進助成を進めてきました。海外発表促進助成が20年を迎えるこの機会に、現在の国内の研究の現状を把握し、本助成事業のこれからの対応を考える基礎資料とすることにしました。

検討資料としては、主に文部科学省科学技術・学術政策研究所がこれまでに自然科学系の論文をもとに分析して取りまとめた公表した「科学技術指標2019」および「科学研究のベンチマーキング2021」(<https://www.nistep.go.jp/wp/wp-content/uploads/NISTEP-RM311またはRM312-SummaryJ.pdf>)を利用しました。

まず、はじめに日本の研究開発費の現状を見ますと、1980年代に比べるとこのところの増加率は低くはなりましたが、それでも毎年3.5%程度の増加を維持していて、2017年は19.1兆円で、米国、中国に次いで世界3位の規模になっています。(資図6-1)。図からも明らかなように、米国と中国の研究開発費総額は近年拮抗しています。2017年には米国が55.6兆円、中国が50.8兆円です。日米中の部門別研究開発費の割合は、企業が72.6～77.5%、大学が7.3～18.9%、公的機関が7.4～15.2%と三国ともに同じような傾向です。日本の研究開発費総額はそれなりの規模ですが、強いていえば他の先進諸国に比べると最近の研究開発費総額の伸び率が少し低下しています。

次に研究の現状を見てみます。2007～2009



資図 6-1. 主要国の研究開発費総額の推移と2017年の部門別研究開発費

(出典：文部科学省科学技術・学術政策研究所、科学技術指標2019、調査資料283、2019年9月)

年と、それから10年後の2017～2019年にそれぞれ発表された全分野の論文数を見ると世界的に年々増え、全体として増加の加速がうかがわれます。国別で見ると主要国では中国がとびぬけて3桁の著しい伸び率を示し、次いで韓国、英国、ドイツ、米国、フランスなどが続いて増加をしているのに対し、日本は1桁の低い増加にとどまっています(資表6-1)。2017～2019年には、中国が米国を抜いて全論文の年間発表数が第1位になっています。しかし、日本では、2000年頃から発表論文数の伸び率が低下し、その後は横ばい傾向が続き研究活動が弱まっていて、研究活動の活発な主要国の動向とは異なります。

日本の論文を8分野に分けてみると、環境・地球科学と臨床医学では論文数の増加が顕著で、それに続いて計算機・数学、工学、材料科学で増加

が見られますが、物理学、化学、基礎生命科学はゼロかマイナスになっていてこれらの分野では研究活動が以前に比べて弱まっていることがうかがわれます(資表6-2)。特に、基礎生命科学、物理学、化学は論文数が多いので全体への影響が大きくなります。臨床医学の論文数の増加には、一つは2000年前後で研究費のほとんどが頭打ちになった中で、保健分野だけは研究費の増加が続いたことが影響している可能性があります。また1990年代は、日本は半導体などのハイテクノロジー産業で世界をリードしていましたが、その後は中国・韓国・台湾などに先を越され、日本の産業の中心は自動車や電気機器などのミディアムテクノロジーに移りました。しかし、それも先細りしています。こうした先端科学技術から脱落しつつある産業界の現状も日本の研究活動に少なから

資表 6-1. 主要国における全分野の論文数の推移

(出典：文部科学省科学技術・学術政策研究所、科学研究のベンチマーキング2021、調査資料312、2021年8月)

論文数			
整数カウント	全分野		
国名	PY2007-2009年 (平均値)	PY2017-2019年 (平均値)	伸び率
米国	289,910	384,978	↑ 33%
中国	108,570	405,364	↑ 273%
ドイツ	79,537	110,153	↑ 38%
英国	77,414	115,280	↑ 49%
日本	75,867	82,934	↑ 9%
フランス	58,735	75,297	↑ 28%
韓国	33,085	61,268	↑ 85%
全世界	1,036,870	1,620,099	↑ 56%

資表 6-2. 日本の分野ごとの論文数の推移

(出典：文部科学省科学技術・学術政策研究所、科学研究のベンチマーキング2021、調査資料312、2021年8月)

整数カウント	論文数		
分野	PY2007-2009年 (平均値)	PY2017-2019年 (平均値)	伸び率
化学	11,238	11,100	→ -1%
材料科学	4,992	5,657	↑ 13%
物理学	11,574	10,159	↓ -12%
計算機・数学	2,797	3,287	↑ 17%
工学	5,093	5,878	↑ 15%
環境・地球科学	3,201	4,563	↑ 43%
臨床医学	14,857	19,808	↑ 33%
基礎生命科学	21,692	21,768	→ 0%

ず影響している可能性が考えられます。

論文数を見ると、最近では世界的に国際共著論文数が増加しており、共著形態も単一国から複数国へと研究活動スタイルが変化している様子がうかがわれます。特に主要国での国際共著率の増加が顕著で、英国、ドイツ、フランスでは2017～2019年に国際共著率が約60～70%になっています（資表6-3）。日本に限らず、アジアの主要国の研究活動の国際化率は高くはありませんが、その中において日本の国際共著率は35.2%と高く、10年間で10.1%と伸びています。ただ、日本よりも国際共著率の低い中国の国際共著論文数が2017～2019年の年平均で107,801と世界第2位の多さが注目されます。

主要国の国際共著の相手を見ると、日本の位置づけが低下していることがうかがわれます。その

一方で、アジア地域の中国と韓国は、国際共著の相手としての存在感が高まっています。例えば、米国の国際共著相手国として、中国は2017～2019年に全8分野中7分野で第1位を占め、臨床医学でも英国に次いで第2位と、米国にとって全分野で重要な存在になっていることが分かります。一方、韓国は全体としては米国の国際共著相手国としての位置づけは低いのですが、特定分野での存在感は極めて高く、材料科学で2位、工学で3位、化学で4位、計算機・数学で6位と高い位置を占めています。日本の場合は、全分野で8位とすべての分野で米国の国際共著相手国になってはいますが、化学8位、材料科学5位、物理学6位、計算機・数学13位、工学11位、環境・地球科学10位、臨床医学10位、基礎生命科学9位とその位置は必ずしも高くありません。

資表 6-3. 主要国の国際共著率と国際共著論文数

（出典：文部科学省科学技術・学術政策研究所、科学研究のベンチマーキング2021、調査資料312、2021年8月）

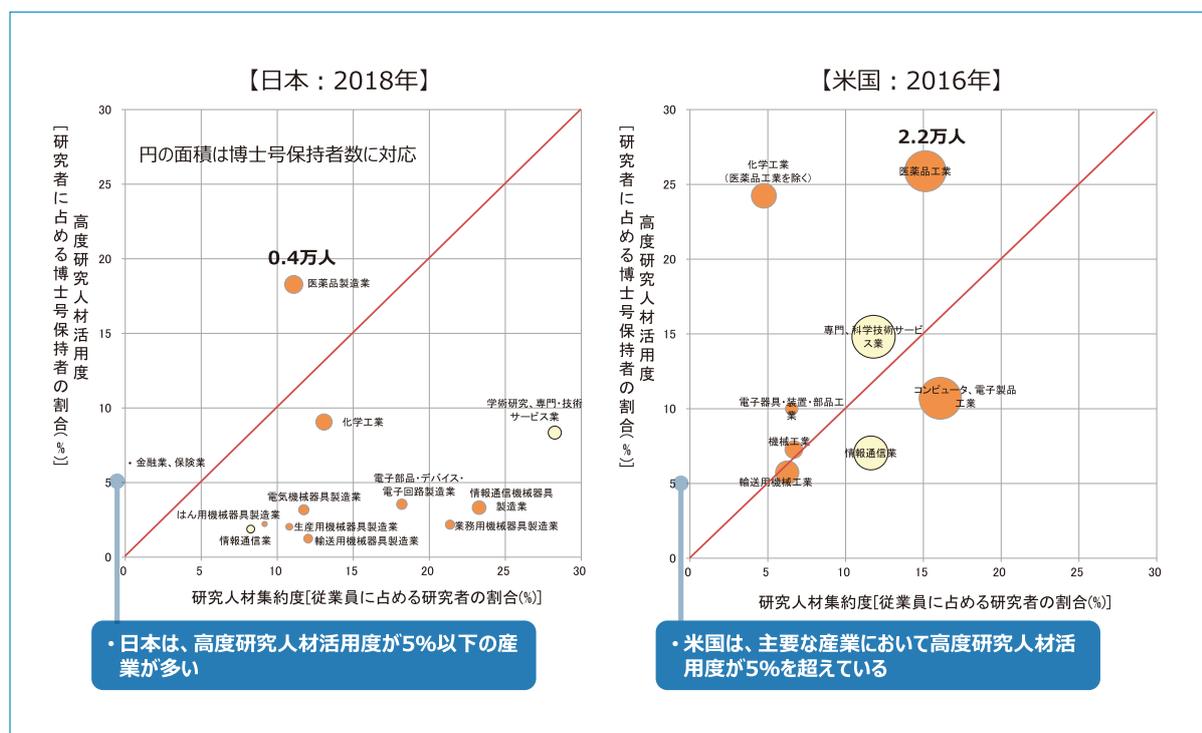
	国際共著率						国際共著論文数 2017-2019年 (平均値)
	2007-2009年			2017-2019年(括弧内は、2007-2009年からの増減)			
	2国間共著論文	多国間共著論文		2国間共著論文	多国間共著論文		
英国	50.6%	32.3%	18.3%	69.5% (+19.0ポイント)	36.0% (+3.7ポイント)	33.5% (+15.3ポイント)	80,156
ドイツ	49.3%	31.8%	17.5%	61.5% (+12.3ポイント)	31.4% (-0.4ポイント)	30.1% (+12.6ポイント)	67,783
フランス	50.2%	32.1%	18.1%	65.1% (+14.9ポイント)	33.3% (+1.2ポイント)	31.8% (+13.7ポイント)	49,033
米国	31.2%	23.5%	7.7%	45.5% (+14.2ポイント)	30.4% (+6.9ポイント)	15.0% (+7.3ポイント)	175,082
日本	25.1%	18.7%	6.4%	35.2% (+10.1ポイント)	21.7% (+3.0ポイント)	13.5% (+7.1ポイント)	29,158
中国	22.3%	18.6%	3.8%	26.6% (+4.3ポイント)	20.5% (+2.0ポイント)	6.0% (+2.3ポイント)	107,801
韓国	26.5%	21.2%	5.4%	31.8% (+5.3ポイント)	21.1% (-0.1ポイント)	10.8% (+5.4ポイント)	19,490

さらに、日本の研究環境の特徴として明らかになってきたことは、日本企業では医薬品製造業と化学工業以外は、社内研究者に占める博士号取得者の割合が著しく低いことです。資図 6-2 に示したように、日本は米国と比べて企業の中の研究者数数の割合はさほど大きくは変わりませんが、違いは研究者中の博士号取得者数の割合です。米国では医薬品工業では博士号取得者が研究者の 25% を超え、化学工業でも 25% 近くあります。そのほかの企業でも 5 ~ 15% に達しています。片や日本では、医薬品製造業で 18%、化学工業で 9% とやや高いのですが、その他は軒並み 5% 以下です。大学と企業の連携の弱さが考えられます。

大学と企業との関係の弱さは、特許にはっきりと表れています。日本は、国際特許数では世界的

に多いのですが、その中で科学的成果（論文）を引用している割合が低く、特許取得に科学的成果の利用されるケースは多くありません。一方、世界的には日本の論文が米国に次いで世界で 2 番目に多くの国際特許に引用されていて、特許取得に利用されています。つまり、日本の科学的成果は国際的には利用されていても、日本の特許には十分に活用されていない可能性があります。

日本では、企業による高度研究人材の活用度が低く、それは大学院と企業の連携の不十分さによるものと考えられ、大学院では企業が必要とする技術や能力を持った高度研究人材の養成が進んでいません。そのため、博士課程修了者の就職先は大学や公立研究所に限定されて極めてポストが限られ、博士課程進学希望者が少ない現状を生み出しています。主要国の人口 100 万人当たりの博



資図 6-2. 日本と米国の従業員中の研究者の割合と研究者中の博士号取得者の割合

(出典：文部科学省科学技術・学術政策研究所、科学技術指標 2019、調査資料 283、2019年9月)

士号取得者数を見ると、すべての国々で年々増加している中で、唯一日本だけが減少しています。2016年度の結果が資図6-3です。2000年度当時、日本はフランス、米国、韓国とほとんど同じレベルでしたが、16年後にはフランスとは1.4倍、米国とは2.2倍、韓国とは2.3倍の差に広がっています。ちなみに英国やドイツとは3倍の差が生まれています。

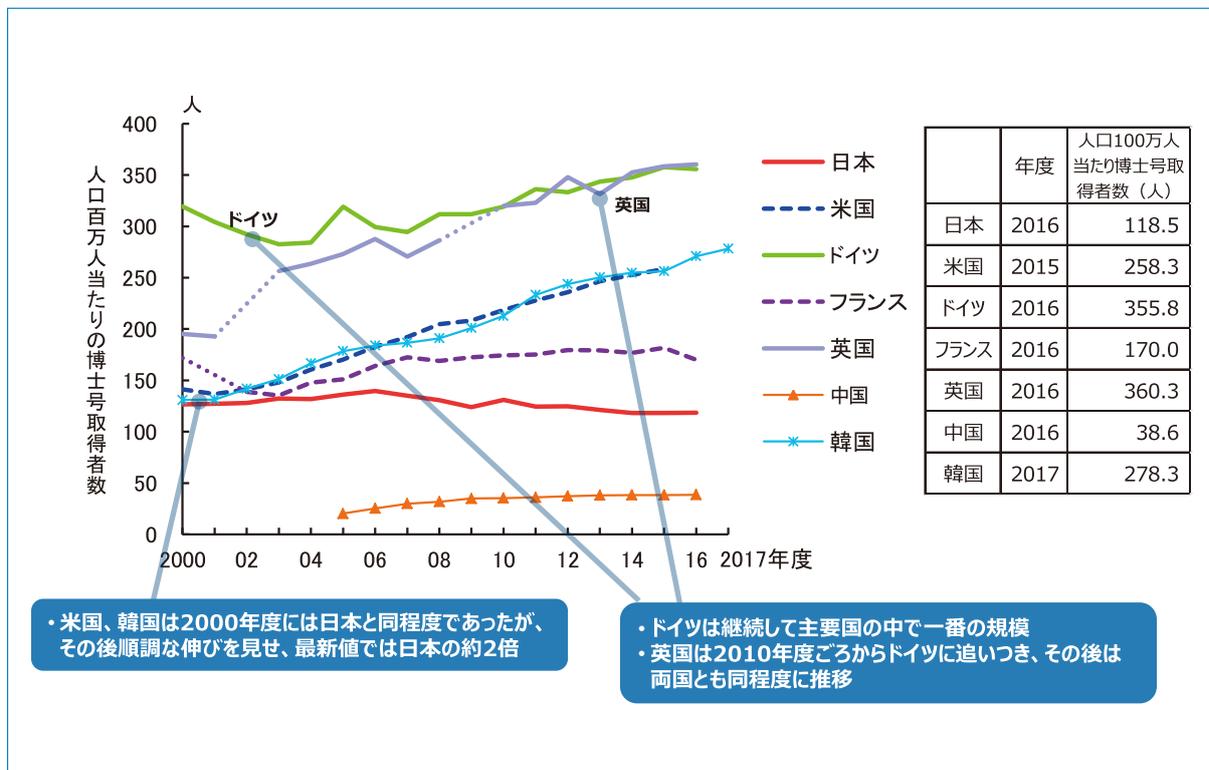
海外発表促進助成事業を進めてきたこれまでの20年間の日本の研究の現状を眺めると、以下のような特徴がうかがわれます。

(1)日本の研究開発費は、2017年度は米国、中国に次いで世界3位の高さですが、最近増加率が低下しています。一方で、(2)日本で発表される論文数は世界5位と必ずしも多くなく、しかも先進国が2～3桁の増加率で伸びている

のに日本は1桁と低い状態です。このような影響からか、(3)博士課程進学者数が年々増加している先進国中で、日本だけが減少傾向が続いています。また、米国企業は研究者の多くが博士号取得者です。(4)日本では、医薬品製造業と化学工業以外では博士号取得者が極めて少ない状態です。さらに、(5)日本の特許では論文引用が少ないのですが、世界的には日本の論文が多く引用されています。また、(6)国際共同研究が活発化して国際共著論文数が多くなっていますが、日本人研究者の貢献は少なくなっています。

こうした現状から、日本では大学と企業の連携が著しく弱く、それが日本の最近の研究事情に強く影響していると考えられます。

(文責 浅倉陽子)



資図 6-3. 主要国の人口 100 万人当たりの博士号取得者数 (文科省科学技術指標 2019)

(出典：文部科学省科学技術・学術政策研究所、科学技術指標 2019、調査資料 283、2019年9月)

## (資料 7) 最近 5 年の海外発表促進助成採択者一覧

年度	助成者名	所属機関：名称	所属機関：職名	集会名称	開催国名
2016	田村 篤志	東京医科歯科大学	助教	10th World Biomaterials Congress	カナダ
	江島 弘晃	順天堂大学医学研究科代謝内 分泌学スポーツロジケー ター	博士研究員	American College of Sports Medicine, 63th Annual Meeting	アメリカ
	本島 徹	自然科学研究機構核融合科 学研究所ヘリカル研究部	准教授	22nd International Conference on Plasma Surface Interactions in Controlled Fusion Devices	イタリア
	中村 雅子	東海大学海洋学部水産学科 生物生産学専攻	講師	13th International Coral Reef Symposium	アメリカ
	宮岡 裕樹	広島大学	特任講師	THERMEC'2016 International Conference on Processing & Manufacturing of Advanced Materials (Processing, Fabrication, Properties, Applications)	オーストリア
	薩摩 真介	広島大学大学院総合科学研究 科文明科学部門地域研究講座	准教授	7th IMEHA International Congress of Maritime History	オーストラリア
	山藤 正敏	奈良文化財研究所	研究員	10th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East	オーストリア
	戸篠 祥	黒潮生物研究所	研究員	5th International Jellyfish Bloom Symposium	スペイン
	安齋 太陽	大阪府立大学大学院工学研 究科数理工学分野	助教	Energy Materials Nanotechnology, Prague Meeting	チェコ
	中村 隆司	東京都市大学工学部都市工 学科	准教授	World Multidisciplinary Civil Engineering- Architecture-Urban Planning Symposium 2016	チェコ
	金 セツピョル	国立民族学博物館	外来研究員	Inter-Congress of International Union of Anthropological and Ethnological Sciences's	クロアチア
	西島 謙一	名古屋大学工学研究科化 学・生物工学専攻	准教授	2016 World Congress on In Vitro Biology Meeting	アメリカ
	別所 裕介	広島大学大学院国際協力研 究科	特任助教	14th Seminar of the International Association for Tibetan Studies	ノルウェー
	佐藤 由似	奈良文化財研究所企画調整 部国際遺跡研究室	研究補佐員	2nd SEAMEO SPAFA International Conference on Southeast Asian Archaeology	タイ
	芦川 直子	自然科学研究機構核融合科 学研究所	助教	22nd International Conference on Plasma Surface Interactions in Controlled Fusion Devices	イタリア
	Agostini Sylvain	筑波大学下田臨海実験セン ター	助教	13th International Coral Reef Symposium	アメリカ
	野村 真未	筑波大学下田臨海実験セン ター	研究員	PROTIST-2016 (Annual meeting of the International Society of Protistologists with another three meetings)	ロシア
	湯山 育子	国立遺伝学研究所生命情報 研究センター遺伝情報分析 研究室	日本学術振興 会特別研究員 (RPD)	13th International Coral Reef Symposium	アメリカ
	樋口 富彦	東京大学大気海洋研究所	特任研究員	13th International Coral Reef Symposium	アメリカ
	内田 博久	信州大学学術研究院（工学 系）	准教授	15th European Meeting on Supercritical Fluids	ドイツ
山口 朋子	医薬基盤・健康・栄養研究 所幹細胞制御プロジェクト	研究員	16th International Congress of Immunology	オーストラリア	
天竺桂 弘子	東京農工大学	講師	ICE 2016 XXV International Congress of Entomology	アメリカ	
金 高義	福島工業高等専門学校建設 環境工学科	助教	COMNAP Symposium 2016	インド	
Daniel Long	首都大学東京人文科学研究 科日本語教育学教室	教授	East Asian Society of Studies on the Japanese Language & Culture	アメリカ	
土屋 健司	創価大学理工学部共生創造 理工学科修復生態学研究室	助教	33rd Congress of the International Society of Limonology 2016	イタリア	

年度	助成者名	所属機関：名称	所属機関：職名	集会名称	開催国名
2016	佐々木 伸	北里大学理学部物理学科	助教	IF-YITP GR+HEP+Cosmo International Symposium VI	タイ
	蜂谷 卓士	名古屋大学大学院生命農学研究科生物化学研究室	特任助教	EMBO Conference: The Nitrogen Nutrition of Plants (NITROGEN 2016)	フランス
	北岸 宏亮	同志社大学理工学部機能分子・生命化学科	准教授	9th International Conference on Heme Oxygenase	チェコ
	藤森 厚裕	埼玉大学	准教授	16th International Conference on Organized Molecular Films (ICOMF16/LB16)	フィンランド
	石川 宏之	静岡大学イノベーション社会連携推進機構	准教授	7th International Conference on UNESCO Global Geoparks, under the Patronage of UNESCO	イギリス
	長澤 勢理香	関西大学経済・政治研究所	非常勤研究員	First World Congress of Business History / 20th Annual Congress of the European Business History Association 2016	ノルウェー
	野老山 貴行	秋田大学理工学部機械工学科	准教授	5th International Conference Integrity-Reliability-Failure	ポルトガル
	森 龍也	筑波大学数理物質系物質工学科	助教	13th International Conference on the Structure of Non-Crystalline Materials (NCM13)	カナダ
	丸山 龍治	日本原子力研究開発機構	研究副主幹	International Conference on Polarised Neutrons for Condensed Matter Investigations 2016	ドイツ
	藤井 政幸	近畿大学	教授	22nd International Round Table on Nucleosides, Nucleotides and Nucleic Acids (XXII IRT2016)	フランス
	杉浦 大輔	東京大学大学院理学系研究科	日本学術振興会特別研究員 (PD)	17th International Congress on Photosynthesis Research	オランダ
	朴 チョン玄	法政大学大学院経済学研究科	教授	EUROGEO 2016	スペイン
	十亀 陽一郎	農業・食品産業技術総合研究機構生物機能利用研究部門	日本学術振興会特別研究員 (PD)	ICE 2016 XXV International Congress of Entomology	アメリカ
	寺本 直純	千葉工業大学工学部応用化学科	准教授	252nd American Chemical Society National Meeting	アメリカ
	炭谷 めぐみ	農業・食品産業技術総合研究機構生物機能利用研究部門	研究員	ICE 2016 XXV International Congress of Entomology	アメリカ
	乾 雅祝	広島大学大学院総合科学研究科	教授	16th International Conference on Liquid and Amorphous Metals (LAM-16)	ドイツ
	山本 裕朗	東北大学大学院医学系研究科	助教	22nd International Shock Interaction Symposium	イギリス
	児玉 謙太郎	神奈川大学	特任助教	38th Annual Meeting of the Cognitive Science Society (CogSci 2016)	アメリカ
	塩瀬 圭佑	国立スポーツ科学センター	研究員	21st Annual Congress of the European College of Sport Science	オーストリア
	山本 大介	自治医科大学医学部感染・免疫学講座医動物学部門	助教	ICE 2016 XXV International Congress of Entomology	アメリカ
	酒井 俊郎	中部大学生命健康科学部スポーツ保健医療学科	教授	21st Annual Congress of the European College of Sport Science	オーストリア
	吉田 拓人	広島大学大学院工学研究院物質化学工学部門	准教授	International Symposium on Pure & Applied Chemistry, (ISPAC) 2016	マレーシア
	高見 泰興	神戸大学大学院人間発達環境学境学研究科	准教授	ICE 2016 XXV International Congress of Entomology	アメリカ
	景山 義之	北海道大学大学院理学研究院化学部門	助教	International Symposium on Pure & Applied Chemistry, (ISPAC) 2016	マレーシア
	下嶋 聖	東京農業大学短期大学部環境緑地学科	助教	8th Conference on Monitoring and Management of Visitors in Recreation and Protected Areas	セルビア
	黄 昱	国文学研究資料館	博士研究員	和漢比較文学会第9回特別例会	台湾

年度	助成者名	所属機関：名称	所属機関：職名	集会名称	開催国名
2016	安東 嗣修	富山大学大学院医学薬学研究部	准教授	Society for Neuroscience (SfN) 46th Annual Meeting	アメリカ
	濱田 次男	都城工業高等専門学校電気情報工学科	教授	11th International Symposium on Advanced and Science and Technology in Experimental Mechanics	ベトナム
	田村 和彦	福岡大学	教授	民俗学の「日常生活」への転換の可能性	中国
	楢木野 宏	山口大学大学院創成科学研究科	助教	Pacific Rim Meeting on Electrochemical and Solid-State Science 2016 (PRIME 2016)	アメリカ
	石井 祐次	九州大学大学院薬学研究院	准教授	21st International Symposium on Microsomes and Drug Oxidations	アメリカ
	高橋 祐美子	東京大学大学院総合文化研究センター	助教	APS Intersociety Meeting, The Integrative Biology of Exercise VII	アメリカ
	後藤 裕樹	九州大学生体防御医学研究所ゲノム腫瘍学	助教	58th American Society of Hematology, Annual Meeting	アメリカ
	吉川 一朗	東京大学	教授	American Geophysical Union (AGU) Fall Meeting	アメリカ
	曾和 英子 (趙 英玉)	神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所	特別研究員	10th Asian Design Culture Society in Ming Chuan University	中国
	中野 英之	室蘭工業大学	教授	12th IUPAC International Conference on Novel Materials and their Synthesis (NMS-XII)	中国
	川内 敬子	甲南大学フロンティアサイエンス学部	講師	BIT's 7th World Gene Convention-2016	中国
	児玉 豊	宇都宮大学バイオサイエンス教育研究センター	准教授	2016 International Symposium on Plant Transformation Biotechnologies	台湾
	中務 明	島根大学生物資源科学部植物育種学	准教授	VI International Symposium on Persimmon	スペイン
	長山 昭夫	鹿児島大学学術研究院理工学域工学系	助教	12th International Biannual Conference on Costs, Ports and Marine Structures (ICOPMAS 2016)	イラン
	浅川 和秀	国立遺伝学研究所	助教	Society for Neuroscience (SfN) 46th Annual Meeting (11th Brain Research Conference, 4th RNA Metabolism in Neurological Disease)	アメリカ
	金子 文成	札幌医科大学保健医療学部	准教授	Society for Neuroscience (SfN) 46th Annual Meeting	アメリカ
	芝山 江美子	神奈川工科大学看護学部	学部長代理 / 教授	ジョグジャカルタ・ステカス大学における招待講演	インドネシア
	松橋 彩衣子	琉球大学熱帯生物圏研究センター	ポスドク研究員	8th Biennial Conference of the International Biogeography Society	アメリカ
	有友 嘉浩	近畿大学理工学部電気電子工学科	准教授	Fusion17	オーストラリア
	野村 大樹	北海道大学大学院水産科学研究センター	助教	Gordon Research Conference (Polar Marine Science)	アメリカ
根岸 洋	国際教養大学	助教	Society for American Archaeology, 82nd Annual Meeting	カナダ	
2017	中田 聡	広島大学大学院理学研究科	教授	XXXVII. Dynamics Days Europe 2017	ハンガリー
	中嶋 誠	大阪大学レーザーエネルギー学研究センターレーザーテラヘルツ研究部門テラヘルツサイエンスグループ	准教授	Energy Material Nanotechnology (EMN) Meeting on Terahertz	アメリカ
	石田 洋平	北海道大学大学院工学研究院材料科学部門先進材料ハイブリッド工学研究室	助教	2017 The Energy Materials and Nanotechnology (EMN) Meeting on Surface and Interface	韓国

年度	助成者名	所属機関：名称	所属機関：職名	集会名称	開催国名
2017	梅屋 潔	神戸大学大学院国際文化学 研究科文化相関専攻	教授	CASCA/IUAES2017 Conference in Ottawa, International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES) and Canadian Anthropology Society (CASCA)	カナダ
	中瀬 由起子	京都大学放射線生物研究セ ンターシステム生物学部門	特任助教	9th International Fission Yeast Meeting	カナダ
	三屋 史朗	名古屋大学大学院生命農学 研究科循環資源学研究分野	講師	Plant Biology 2017	アメリカ
	下元 浩晃	愛媛大学大学院理工学研究 科物質生命工学専攻	特任講師	253rd American Chemical Society, National Meeting & Exposition	アメリカ
	遠藤 俊子	京都橘大学	教授 / 看護学 研究科長	31st ICM Triennial Congress 2017	カナダ
	戸丸 仁	千葉大学大学院理学研究科 地球生命圏科学専攻地球科 学コース	准教授	Geological Society of America, 2017 Cordilleran Section Meeting	アメリカ
	勝本 之晶	福岡大学	准教授	2017 Materials Research Society (MRS) Spring Meeting & Exhibit	アメリカ
	奥島 大	神戸芸術工科大学	研究員	2017 Annual Meeting of the American College of Sports Medicine	アメリカ
	難波 貴代	神奈川工科大学看護学部看 護学科	教授	International Council of Nursing Congress 2017	スペイン
	萩原 啓実	桐蔭横浜大学	教授	44th European Calcified Tissue Society Congress (ECTS2017)	オーストリア
	中瀬 崇	順天堂大学スポーツ健康科 学部スポーツ科学科運動生 理学研究室	助手	American College of Sports Medicine	アメリカ
	山形 高司	日本女子大学家政学部被服 学科	助教	American College of Sports Medicine, 64th Annual Meeting	アメリカ
	林 拓志	東京農工大学工学研究院	日本学術振興 会特別研究員 (PD)	27th Annual Meeting of the Neural Control of Movement	アイルランド
	藤田 直子	九州大学大学院芸術工学研 究院環境デザイン部門	准教授	Green Infrastructure Conference, in Orvieto, Italy on April 2017.	イタリア
	上原 亮太	北海道大学創成研究機構	特任助教	Cold Spring Harbor Asia Meeting, Cilia and Centrosomes	中国
	吉田 二美	自然科学研究機構国立天文 台国際連携室	専門研究職員	Asteroids, Comets, Meteors 2017	ウルグアイ
	筒井 孝子	兵庫県立大学大学院経営研 究科	教授	ICIC17 - 17th International Conference on Integrated Care	アイルランド
	宮崎 彰	高知大学農林海洋科学部	准教授	9th Asian Crop Science Association Conference	韓国
	安在 絵美	お茶の水女子大学	日本学術振興 会特別研究員 (PD)	2017 Osteoarthritis Research Society, International (OARSI) World Congress	アメリカ
	青野 友哉	伊達市噴火湾文化研究所	学芸員	15th EAJS International Conference 2017	ポルトガル
	高尾 賢一郎	東京外国語大学アジア・ア フリカ言語文化研究所	日本学術振興 会特別研究員 (PD)	International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, Commission on the Middle East Conference	ポーランド
	本田 歩美	長崎大学大学院医歯薬学総 合研究科保健学専攻看護学 講座	客員研究員	International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG), 21st World Congress Organizing Committee	アメリカ
	吉田 純	北里大学	講師	10th Liquids Matter Conference (Liquids 2017)	スロベニア

年度	助成者名	所属機関：名称	所属機関：職名	集会名称	開催国名
2017	半田 直人	大阪大学総合学術博物館	研究支援推進員	77th Annual Meeting of the Society of Vertebrate Paleontology	カナダ
	大槻 毅	流通経済大学スポーツ健康科学部	教授	22nd Annual Congress of the European College of Sport Science	ドイツ
	谷本 裕樹	奈良先端科学技術大学院大学物質創成科学研究科	助教	26th International Society of Heterocyclic Chemistry (ISHC) Congress	ドイツ
	佐野 恭平	白滝ジオパーク	技師	International Association of Volcanology and Chemistry of the Earth's Interior (IAVCEI) 2017 Scientific Assembly	アメリカ
	百田 武司	日本赤十字広島看護大学看護学部看護学科老年看護学領域	教授	2nd Asia-Pacific Nursing Research Conference	台湾
	八木 百合子	国立民族学博物館グローバル現象研究部	機関研究員	4º Congreso Latinoamericano y Caribeño de Ciencias Sociales(FLACSO)	スペイン
	井手 淳一郎	九州大学持続可能な社会のための法断科学センター	助教	9th International Symposium on Ecosystem Behavior (BIOGEOMON 2017)	チェコ
	池田 茉莉	千葉工業大学工学部教育センター化学教室	助教	12th International Symposium on Macrocyclic and Supramolecular Chemistry (ISMSC) in Conjunction with ISACS: Challenges in Organic Materials & Supramolecular Chemistry	イギリス
	黒澤 昌志	名古屋大学大学院工学研究科物質科学専攻	講師	36th Annual International Conference on Thermoelectrics	アメリカ
	松村 実生	愛知学院大学薬学部薬化学講座	助教	26th International Society of Heterocyclic Chemistry (ISHC) Congress	ドイツ
	黒崎 陽平	長崎大学熱帯医学研究所新興感染症学分野	助教	9th International Symposium on Filoviruses	ドイツ
	佐藤 鋭一	神戸大学大学教育推進機構	助教	International Association of Volcanology and Chemistry of the Earth's Interior (IAVCEI) 2017 Scientific Assembly	アメリカ
	南野 亮子	岐阜大学流域圏科学研究センター植生生理生態研究分野研究室	講師（研究機関研究員）	8th International Conference on Wind and Trees (IUFRO)	アメリカ
	清水 郁郎	芝浦工業大学建築学部建築学科住環境計画研究室	教授	13th International Conference on Thai Studies "Globalized Thailand?" Connectivity, Conflict, and Conundrums of Thai Studies	タイ
	中澤 暦	福岡工業大学総合研究機構環境科学研究科	研究員	13th International Conference on Mercury as a Global Pollutant	アメリカ
	持田 浩治	慶応義塾大学経済学部生物学教室	助教	Behaviour 2017 (Joint Meeting of the 35th International Ethological Conference (IEC) and the 2017 Summer Meeting of the Association for the Study of Animal Behaviour (ASAB))	ポルトガル
	宇野 雄一	神戸大学大学院農学研究科資源生命科学専攻応用植物学講座	准教授	3rd International Strawberry Congress	ベルギー
	山田 英佑	総合研究大学院大学先端科学研究科生命共生体進化学専攻	特別研究員	77th Annual Meeting of the Society of Vertebrate Paleontology	カナダ
	池田 暁彦	東京大学物性研究所	助教	International Conference on Strongly Correlated Electron System (SCES) 2017	チェコ
	兵藤 憲吾	龍谷大学理工学部物質化学科	助教	International Symposium on Synthesis and Catalysis 2017	ポルトガル
副島 久実	水産大学校水産流通経営学学科	講師	Conference for MARE (Maritime Research)/ Global Research Network for Small-Scale Fisheries TBTI (Too Big To Ignore)	オランダ	

年度	助成者名	所属機関：名称	所属機関：職名	集会名称	開催国名
2017	増田 周子	関西大学文学部・文学研究科	教授	Japan: Pre-modern, Modern and Contemporary. A Return Trip from the East to the West.	ルーマニア
	高津 翔平	岐阜県博物館自然係	臨時主事	77th Annual Meeting of the Society of Vertebrate Paleontology	カナダ
	内山 武人	日本大学薬学部有機化学研究室	教授	19th European Carbohydrate Symposium	スペイン
	新田 時也	東海大学熊本キャンパス	准教授	2017年 南臺科技大学応用日語系 国際シンポジウム	台湾
	武藤 望生	東海大学	特任講師	10th Indo-Pacific Fish Conference	タヒチ
	門崎 学	リモート・センシング技術センター	主任研究員	American Geophysical Union (AGU) Fall Meeting	アメリカ
	水田 賢志	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科分子標的医学研究センター	助教	2nd International Conference on Pharmaceutical Chemistry	スペイン
	轟木 堅一郎	静岡県立大学薬学部	教授	46th International Symposium on High Performance Liquid Phase Separations and Related Techniques (HPLC2017, Jeju)	韓国
	川島 尚宗	山口大学大学情報機構蔵文化財資料館	助教	2nd Congress on the Anthropology of Salt	メキシコ
	藤田 直子	秋田県立大学生物資源科学部生物生産科学科	教授	2017 Starch Round Table	アメリカ
	塚田 千恵	名古屋大学シンクロトロン光研究センター	特任助教	11th International Symposium on Atomic Level Characterizations for New Materials and Devices '17 (ALC '17)	アメリカ
	宇梶 裕	金沢大学理工研究域物質化学系	教授	13th IUPAC International Conference on Novel Materials and their Synthesis (NMS-XIII)	中国
	善方 文太郎	大阪医科大学医学部生命科学講座生理学教室	助教	Society for Neuroscience (SfN) 47th Annual Meeting	アメリカ
	小林 雅人	横浜商科大学商学部観光マネジメント学科	学長・教授	17th French-Japanese Oceanography Symposium -COAST Bordeaux 2017-	フランス
	石川 義宗	東洋美術学校	専任講師	2017 International Association of Societies of Design Research (IASDR) Conference	アメリカ
	及川 大輔	大阪市立大学大学院医学研究科分子病態学	講師	Keystone Symposia (Ubiquitin Signaling)	アメリカ
	伊地知 敬	東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻	特任研究員	2018 Ocean Sciences Meeting	アメリカ
	朴 チョン玄	法政大学大学院経済学研究科	教授	EUROGEO 2018	ドイツ
	葛城 (池田) 裕美	日本大学短期大学部食物栄養学科	准教授	16th Annual Hawaii International Conference on Education	アメリカ
	前島 美保	京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター	客員研究員	Twenty-Fourth Annual JSA Conference	アメリカ
山崎 龍	昭和薬科大学薬品化学研究室	准教授	255th ACS National Meeting & Exposition	アメリカ	
2018	森塚 (松岡) かおり	農業・食品産業技術総合研究機構果樹茶業研究部門	任期付研究員	10th International Symposium on Plant-Soil Interactions at Low pH (10th PSILPH)	マレーシア
	高尾 信太郎	国立極地研究所生物圏研究グループ	助教	Marine Ecosystem Assessment for the Southern Ocean	オーストラリア
	今山 武志	岡山理科大学自然科学研究所	准教授	Asia Oceania Geosciences Society (AOGS) 15th Annual Meeting	アメリカ
	福井 浩二	芝浦工業大学システム理工学部生命科学科	教授	19th Biennial Meeting Society for Free Radical Research International	ポルトガル
	竹花 佑介	長浜バイオ大学	准教授	8th International Symposium on Vertebrate Sex Determination	アメリカ

年度	助成者名	所属機関：名称	所属機関：職名	集会名称	開催国名
2018	田中 嘉法	電気通信大学大学院情報理工学研究科	博士研究員	American College of Sports Medicine, 65th Annual Meeting	アメリカ
	玉水 玲央	早稲田大学大学院政治学研究科政治学専攻	博士後期課程3年	International Studies Association	アメリカ
	星 博幸	愛知教育大学教育学部自然科学系理科教育講座	准教授	European Geosciences Union (EGU), General Assembly 2018	オーストリア
	羽曾部 卓	慶應義塾大学理工学部化学科	准教授	223rd The Electrochemical Society Meeting	アメリカ
	矢野 十織	東京慈恵会医科大学医学部解剖学講座	助教	Fifth Conference "Interdisciplinary Approaches in Fish Skeletal Biology"	ポルトガル
	勝間田 高明	東海大学海洋学部	講師	Asia Oceania Geosciences Society (AOGS) 15th Annual Meeting	アメリカ
	北野 裕子	国立環境研究所生物・生態系環境研究センター	特別研究員	4th Asia-Pacific Coral Reef Symposium	フィリピン
	新川 はるか	京都大学大学院生命科学研究所	博士後期課程3年	18th International Conference on the Cell and Molecular Biology of Chlamydomonas	アメリカ
	永井 平	東京大学大学院理学系研究科	特任研究員	Asia Oceania Geosciences Society (AOGS) 15th Annual Meeting	アメリカ
	北田 昇雄	電気通信大学大学院	博士後期課程3年	20th International Symposium on Bioluminescence and Chemoluminescence	フランス
	金川 哲也	筑波大学システム情報系	助教	47th International Congress and Exposition on Noise Control Engineering	アメリカ
	沈 雨香	早稲田大学大学院教育研究科	博士後期課程5年	Fifth World Congress for Middle Eastern Studies (WOCMES)	スペイン
	西上 幸範	京都大学大学院理学研究科時空間秩序教室	日本学術振興会特別研究員(PD)	Phycological Society of America and International Society of Protistologists Conference 2018	カナダ
	大城 武史	東京大学	特任研究員	Federation of European Neurosciences Societies	ドイツ
	小柳 えり	川崎医療福祉大学医療技術学部健康体育学科	助教	23rd Annual Congress of the European College of Sport Science	アイルランド
	椎野 勇太	新潟大学	准教授	8th International Brachiopod Congress	イタリア
	林 慶	岡山理科大学獣医学部	助教	14th International congress of Parasitology	韓国
	荒木 優希	京都大学大学院工学研究科	特定助教	Goldschmidt Conference 2018	アメリカ
	宇津川 喬子	立正大学地球環境科学部地理学科	助教	20th International Sedimentological Congress	カナダ
	中村 真男	東京工科大学大学院ハイオ・情報メディア研究科	助教	29th International Carbohydrate Symposium (ICS2018)	ポルトガル
	得平 茂樹	首都大学東京大学院理学研究科生命科学専攻	准教授	16th International Symposium on Phototrophic Prokaryotes	カナダ
	伊藤 悦子	高知大学教育研究部自然科学系理学部門	非常勤講師	36th International Symposium on Lattice Field Theory	アメリカ
	並河 英紀	山形大学理学部理学科非線形化学研究室	教授	Gordon Research Conference "Decrypting and Controlling Self-Organized Structures Through Theories and Experiments"	スイス
早川 麻美子	日本大学理工学部理工学研究所	研究員	27th IUPAC International Symposium on Photochemistry	アイルランド	
山根 隆宏	神戸大学大学院人間発達環境学研究科こころ系講座	准教授	25th Biennial Meeting of the International Society for the Study of Behavioural Development	オーストラリア	
井川 純一	大分大学	准教授	126th Annual Convention of American Psychological Association 2018	アメリカ	
秋月 真一	創価大学理工学部	助教	2nd International Conference on Bioresource Technology for Bioenergy, Bioproducts & Environmental Sustainability (BIORESTEC)	スペイン	

年度	助成者名	所属機関：名称	所属機関：職名	集会名称	開催国名
2018	山口 創一	九州大学総合理工学研究院	助教	ECSA 57	オーストラリア
	志垣 智子	社会福祉法人敬友会高齢者住宅研究所	研究員	Eighth International Conference on Health, Wellness & Society	イギリス
	熊谷 孝司	G・Aホールディングス株式会社		17th World Sanskrit Conference	カナダ
	宮本 明子	同志社女子大学	助教	International Conference on Social Science and Business	アメリカ
	陳 璐	東京外国語大学大学院	博士後期課程5年	12th International ACS Crossroads in Cultural Studies Conference	中国
	Karusigariralan	東京外国語大学大学院総合国際学研究科 PCS コース	博士後期課程2年	IUAES 18th World Congress	ブラジル
	伊藤 岳	大阪市立大学大学院理学研究科生物地球系専攻	博士後期課程1年	ISBE (International Society for Behavioral Ecology) 2018	アメリカ
	木村 駿太	筑波大学生命環境系	日本学術振興会特別研究員(PD)	42th COSPAR Scientific Assembly	アメリカ
	Hoang Nam Hai	東京工業大学大学院	一貫制博士課程5年	Gordon Research Seminar and Gordon Research Conference on Biocatalysis	アメリカ
	A fifa Ayu Koesoema	東京工業大学大学院生命理工学院	一貫制博士課程4年	Gordon Research Seminar and Gordon Research Conference on Biocatalysis	アメリカ
	鈴木 麻菜美	国立音楽大学大学院音楽研究科	博士後期課程3年	ICTM Joint Symposium of the Study Group on Music and Minorities and the Study Group on Music and Gender	オーストリア
	安田 裕紀	神戸大学内海域環境教育研究センター	講師(研究機関研究員)	VII International Workshop on Collapse Calderas	インドネシア
	武田 紘平	筑波大学体育系運動生理学研究室	特任助教	International Conference on Adaptatiopns and Nutrition in Sports (ICANS)	タイ
	村田 圭代	東京藝術大学大学院音楽研究科音楽専攻	一貫制博士課程5年	18th Biennial International Conference on Baroque Music	イタリア
	李 哲揆	理化学研究所バイオリソース研究センター微生物材料開発室	特別研究員	17th International Symposium on Microbial Ecology (ISME)	ドイツ
	森 郁晃	長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科	一貫制博士課程5年	17th International Symposium on Microbial Ecology (ISME)	ドイツ
	西海 望	基礎生物学研究所神経生理学研究室	NIBB リサーチフェロー	18th International Meeting on Information Display	韓国
	野口 舞子	お茶の水女子大学基幹研究院	リサーチフェロー	Fifth World Congress for Middle Eastern Studies (WOCMES)	スペイン
	神田 真司	東京大学大学院理学系研究科	准教授	Intercongress of the Asia and Oceania Society for Comparative Endocrinology	オーストラリア
	吉田 早悠里	南山大学国際教養学部	准教授	20th International Conference of Ethiopian Studies	エチオピア
丸山 龍治	日本原子力研究開発機構 J-PARC センター	研究副主幹	Physics of X-ray and Neutron Multilayer Structures 2018	フランス	
宋 苑瑞	早稲田大学教育学部	非常勤講師	American Geophysical Union (AGU) Fall Meeting	アメリカ	
宮地 悟代	東京農工大学大学院工学研究院先端物理工学部門	准教授	International Conference on Ultrafast Optical Science (UltrafastLight-2018)	ロシア	
森 龍也	筑波大学数理物質系物質工学科	助教	1st International Conference on Dielectric Photonic Devices and Systems Beyond Visible (D-Photon 2018)	イタリア	
刀祢 和樹	長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科環境海洋資源学専攻	博士後期課程2年	Fourth Climate Impacts on Top Predators (CLIOTOP) Symposium	台湾	

年度	助成者名	所属機関：名称	所属機関：職名	集会名称	開催国名
2018	佐々木 俊介	東京都健康長寿医療センター研究所	非常勤研究員	International Solid Waste Association, World Congress 2018	マレーシア
	高原 英生	函館国際水産・海洋都市推進機構	連携研究員主任	Cephalopod International Advisory Council Conference	アメリカ
	小林 史幸	日本獣医生命科学大学	講師	IDF world Dairy Summit 2018	韓国
	久保田 夏子	首都大学東京大学院人間健康科学研究科同専攻ヘルスプロモーションサイエンス学域行動生理学研究室	特任助教	Society for Neuroscience (SfN) 48th Annual Meeting	アメリカ
	山崎 敦子	筑波大学生命環境系動物系統分類学教室	日本学術振興会特別研究員(RPD)	Developmental Biology of the Sea Urchin XXV Meeting	アメリカ
	阿部 達雄	鶴岡工業高等専門学校	助教	SETAC North America 39th Annual Meeting	アメリカ
	山本 亮	金沢医科大学生理学1	講師	Society for Neuroscience (SfN) 48th Annual Meeting	アメリカ
	吉田 拓人	広島大学大学院工学研究科応用化学専攻反応設計化学研究室	准教授	19th International Congress on Pure & Applied Chemistry	マレーシア
	岸 正敏	創価大学理工学部	助教	Algae Biomass Summit 2018	アメリカ
	水田 賢志	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科分子標的医学研究センター	助教	19th International Congress on Pure & Applied Chemistry	マレーシア
	松田 晃史	東京工業大学物質理工学院材料系	講師	2018 Materials Research Society (MRS) Fall Meeting & Exhibit	アメリカ
	中川 健一	宇都宮大学	技術職員	29th International Symposium on Transport Phenomena	アメリカ
	伊東 雄樹	明治大学大学院	博士後期課程3年	2018-2019 International Soils Meeting	アメリカ
	谷口 友梨	大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター	研究員	International Convention of Psychological Science	フランス
今井 喜胤	近畿大学	准教授	Pure and Applied Chemistry International Conference 2019 (PACCON 2019)	タイ	
2019	谷口 京子	名古屋大学アジア共創教育研究機構	日本学術振興会特別研究員(PD)	Comparative and International Education Society	アメリカ
	松尾 俊輔	東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻	教務補佐員	Latin American Studies Association	アメリカ
	安藤 佑介	瑞浪市化石博物館	学芸員	7th Symposium on Mesozoic and Cenozoic Decapod Crustaceans	スロベニア
	蘇 浩	関西大学大学院東アジア文化研究科	博士後期課程3年	11th Annual Meeting of Society for Cultural Interaction in East Asia Conference	ドイツ
	浅見 祐也	学習院大学	助教	International Symposium on Molecular Beams 2019	スコットランド
	後藤 和宏	相模女子大学人間社会学部	准教授	Comparative Cognition Conference	アメリカ
	和川 拓	水産研究・教育機構日本海区水産研究所資源環境部海洋動態グループ	任期付研究員	8th EGO Meeting and International Glider Workshop	アメリカ
	飛内 悠子	盛岡大学	准教授	European Conference on African Studies 2019	イギリス
	浅岡 聡	神戸大学内海域環境教育研究センター海洋環境管理研究室	助教	4th Green and Sustainable Chemistry Conference	ドイツ
	金居 督之	株式会社 PREVENT	理学療法士	World Confederation for Physical Therapy Congress 2019	スイス

年度	助成者名	所属機関：名称	所属機関：職名	集会名称	開催国名
2019	韓 佳琳	大阪府立大学工学研究科海洋システム工学	助教	38th International Conference on Ocean, Offshore & Arctic Engineering	イギリス
	鈴木 由希	奈良県立医科大学大学院微生物感染症学講座	博士課程3年	29th European Congress of Clinical Microbiology and Infectious Diseases	オランダ
	Nicholas Peeters	早稲田大学大学院政治学研究科	博士後期課程3年	2019 SHAFR Annual Meeting	アメリカ
	小野 公輔	東京理科大学	助教	14th International Symposium on Macrocyclic and Supramolecular Chemistry	イタリア
	高場 智博	明治大学大学院文学研究科地理学専攻	博士後期課程3年	European Geosciences Union General Assembly 2019	オーストリア
	金子 浩一	宮城大学事業構想学群	准教授	European Network of Japanese Associations, the 9th conference	ドイツ
	平 義隆	産業技術総合研究所分析計測標準研究部門放射線イメージング計測研究グループ	主任研究員	5th International Conference on Optical Angular Momentum	カナダ
	張 曉賓	芝浦工業大学 SIT 総合研究所	准教授	10th International Conference on Materials for Advanced Technologies (ICMAT 2019)	シンガポール
	井上 幸男	長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科環境海洋資源学専攻水圏植物生態学研究室	博士後期課程2年	23rd International Seaweed Symposium	韓国
	山中 真人	大阪市立大学	特任助教	15th International Conference of Computational Methods in Sciences and Engineering (ICCMSE2019)	ギリシャ
	丸山 友美	法政大学	兼任講師	Mediations: Disability, Technology, and the Arts	アメリカ
	林 千里	群馬大学大学院理工学府理工学専攻物質・生命理工学領域環境調和型材料化学研究室	博士後期課程2年	BIOPOL2019	スウェーデン
	五賀 友継	筑波大学大学院人間総合科学研究科体育科学専攻スポーツ政策学研究室	博士後期課程3年	2019年第13届東北亜体育運動史学術研討会	台湾
	高橋 佳代	鹿児島大学大学院臨床心理学研究科	准教授	11th Biennial Conference of the International Society of Critical Health Psychology	スロバキア
	有川 幹彦	高知大学理工学部生物科学科動物生理学研究室	准教授	10th International Congress of Comparative Physiology and Biochemistry	カナダ
	二文字屋 脩	早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター	講師	VI International Multidisciplinary Scientific Conference on Social Sciences & Arts	ブルガリア
	織田 麻衣	群馬大学大学院医学系研究科分子細胞生物学分野	研究員	ISN-ASN Meeting 2019	カナダ
	鷹尾 康一郎	東京工業大学	准教授	GLOBAL/Top Fuel 2019	アメリカ
	橋本 徹	横浜国立大学大学院工学研究院機能の創生部門	助教	20th IUPAC International Symposium on Organometallic Catalysis Directed Towards Organic Synthesis	ドイツ
	山田 昌樹	信州大学理学部理学科地球学コース	助教	20th Congress of the International Union for Quaternary Research (INQUA)	アイルランド
	奥田 徹哉	産業技術総合研究所生物プロセス研究部門	主任研究員	25th International Symposium on Glycoconjugates	イタリア
	角野 貴志	高知大学農林海洋科学部水族環境学研究室	特任研究員	EMBO Workshop, The Molecular Life of Diatoms	イギリス
	矢作 忠弘	日本大学薬学部	助教	American Society of Pharmacognosy, 2019 Annual Meeting	アメリカ
	佐藤 臨	首都大学東京都市環境科学部	特任研究員	World Congress of Malacology 2019	アメリカ

年度	助成者名	所属機関：名称	所属機関：職名	集会名称	開催国名
2019	山下 良平	石川県立大学生物資源環境学部環境科学科地域計画学研究室	准教授	16th Pacific Regional Science Conference Organizer (PRSCO 2019)	タイ
	平原 南萌	創価大学理工学部	助教	IWA Conference on Algal Technologies and Stabilization Ponds for Wastewater Treatment and Resource Recovery IWAAlgae 2019	スペイン
	白井 香里	新潟大学大学院自然科学研究科	博士後期課程3年	6th International Conference on the Chemistry and Physics of the Transactinide Elements (TAN19)	ドイツ
	山下 知子	たかせクリニック地域医療研究部	研究員	41st International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society	ドイツ
	亀淵 萌	東京理科大学理学部第一部化学科	助教	23rd International Symposium on the Photochemistry and Photophysics of Coordination Compounds (ISPPCC 2019)	中国
	酒井 理	京大大学理学研究科生物科学専攻動物行動学研究室	研究員	A Joint Meeting of the 56th Annual Conference of the Animal Behavior Society and the 36th International Ethological Conference	アメリカ
	橋本 征奈	神奈川大学	ポストドクター	FEMTO14	中国
	伊藤 真	京都大学大学院地球環境学学	教務補佐員	A Joint Meeting of the 56th Annual Conference of the Animal Behavior Society and the 36th International Ethological Conference	アメリカ
	羽田 裕貴	茨城大学	博士特別研究員	20th Congress of the International Union for Quaternary Research (INQUA)	アイルランド
	花 暁波	京都大学東南アジア地域研究研究所	機関研究員	Summer School on Researching Land Governance and Land Relations in the Mekong Region	タイ
	梁 正樹	埼玉大学理工学研究科素粒子論研究室	研究支援員 / 非常勤講師	FLASY2019: 8th Workshop on Flavor Symmetries and Consequences in Accelerators and Cosmology	中国
	松田 靖弘	静岡大学大学院工学領域化学バイオ工学系列	准教授	Advances in Polymer Science and Rubber Technology	インド
	進藤 直哉	九州大学大学院薬学研究院創薬ケミカルバイオロジー分野	助教	EFMC International Symposium on Advances in Synthetic and Medicinal Chemistry (EFMC-ASMC'19)	ギリシャ
	南 彰	静岡県立大学大学院薬学研究院生化学講座	講師	25th International Symposium on Glycoconjugates	イタリア
	豊島 ゆう子	東北大学大学院文学研究科中国思想研究室	博士後期課程3年	江南儒学国際研討会	中国
	土岐 文乃	東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻都市・建築デザイン学講座	助教	36th Annual Conference of the Society of Architectural Historians, Australia and New Zealand	オーストラリア
	下川 倫子	福岡工業大学	助教	XXXIX. Dynamics Days Europe 2019	ドイツ
	植村 まどか	京都外国語大学大学院	博士後期課程3年	II Coloquio de Arqueología de Nicaragua	ニカラグア
	山口 康太	東京海洋大学	日本学術振興会特別研究員(PD)	2019 Cryogenic Engineering Conference and International cryogenic Materials Conference (CEC/ICMC 2019)	アメリカ
	平岩 将良	農業・食品産業技術総合研究機構生物機能利用研究部門昆虫制御研究領域昆虫相互作用ユニット	研究員	Island Biology 2019	フランス

年度	助成者名	所属機関：名称	所属機関：職名	集会名称	開催国名
2019	坂田 有実	名古屋大学大学院生命農学研究科	博士後期課程 3年	25th IUFRO World Congress	ブラジル
	阿久根 晋	京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻歴史文化社会論講座	博士後期課程 3年	11th International Convention of Asia Scholars	オランダ
	寺内 正彦	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科顎顔面外科	特任助教	8th International Conference on Mechanics of Biomaterials and Tissues	アメリカ
	落合 博	広島大学大学院統合生命科学科	講師	Symposium on Single Molecule & Chromatin	オーストラリア
	下本 英津子	日本福祉大学	非常勤講師	Wisdom for Living with Natural Disasters, Initiatives by Local Residents due to Changes in their Society-	フィリピン
	松井 英明	鹿児島大学水産学部水産資源科学分野	特任研究員	Aquaculture Europe 2019	ドイツ
	Sharmin Shishir	富山大学研究推進機構極東地域研究センター	博士研究員	2019 6th International Conference on Environmental Systems Research (ICESR 2019)	オーストラリア
	畔田 暁子	明星大学	教員(講師)	InSEA SEMINAR, Art Education: Conflicts and Connections	マルタ
	藤川 美代子	南山大学人文学部人類文化学科	准教授	7th East Asian Island and Ocean Forum	韓国
	辻井 浩希	小笠原ホエールウォッチング協会	研究員	World Marine Mammal Conference 2019	スペイン
	中山 英俊	長野工業高等専門学校	准教授	64th Annual Conference on Magnetism and Magnetic Materials	アメリカ
	阿部 博和	岩手医科大学全学教育推進機構教養教育センター生物学科	助教	Fourth Asian Marine Biology Symposium	台湾
	塩崎 彬	国立科学博物館動物研究部脊椎動物研究グループ	支援研究員	World Marine Mammal Conference 2019	スペイン
	菊池 夢美	京都大学野生動物研究センター	特定研究員	World Marine Mammal Conference 2019	スペイン
	植木野 宏	山口大学	助教	236th ECS Meeting	アメリカ
	川井田 俊	島根大学エスチュアリー研究センター水圏生態研究部門	助教	Fourth Asian Marine Biology Symposium	台湾
	加治屋 勝子	鹿児島大学農学部食料生命科学科	講師	International Medicine & Health Sciences Congress 2019	フランス
	澁谷 未央	千葉科学大学危機管理学部動物危機管理学科	講師	World Marine Mammal Conference 2019	スペイン
	岡本 康汰	琉球大学大学院理工学研究科海洋環境学専攻琉球島嶼生物地理学研究室	博士後期課程 1年	9th World Congress of Herpetology	ニュージーランド
	山口 智広	工学院大学先進工学部応用物理学科結晶成長研究室	准教授	3rd International Symposium of the Vacuum Society of the Philippines	フィリピン
	和田 恵梨	群馬大学大学院生体調節研究所代謝シグナル解析分野	博士課程 3年	American Diabetes Association's 80th Scientific Sessions	アメリカ (オンライン)
	畠山 航平	広島大学大学院先進理工系科学研究科地球惑星システム学プログラム	研究員	American Geophysical Union (AGU) Fall Meeting	アメリカ (オンライン)
	宋 苑瑞	早稲田大学教育学部	非常勤講師	American Geophysical Union (AGU) Fall Meeting	アメリカ (オンライン)

## (資料 8) 日本科学協会の沿革・組織等

日本科学協会は、科学の振興を目的として 1924 (大正 13) 年に設立され 100 年近い歴史をもつ財団で、2012 (平成 24) 年に公益財団法人となりました。

設立以来、時代や社会情勢の変化の中で科学や科学者のあり方を考え、科学と社会のつながりを深める活動をしており、1988 (昭和 63) 年からは、日本財団の支援を受けて開始した笹川科学研究助成事業を中心に、事業を展開しています。

### 日本科学協会の沿革

- 1921 年 前身となる「科学知識普及会」が任意団体として発足。7月に月刊誌「科学知識」創刊 (1950年5月まで)
- 1924 年 「財団法人科学知識普及会」として財団法人化
- 1939 年 月刊誌「採集と飼育」創刊 (1990年に休刊)
- 1941 年 第二次世界大戦の影響により法人の運営業務のほとんどが休眠、科学書籍の発行などの活動は細々と継続
- 1944 年 東京工業大学内の日本科学協会と合併して「財団法人日本科学協会」と改称
- 1975 年 財団法人日本船舶振興会 (現日本財団) 会長 笹川良一氏、日本学術会議会長 茅誠司氏により休眠していた法人が活動再開
- 1976 年 日本語版月刊「ワイルドライフ」創刊 (1984年まで)
- 1988 年 財団法人日本船舶振興会から助成を受け「笹川科学研究助成」事業開始
- 1992 年 「青少年の科学体験まつり」開催 (2002年まで)
- 1999 年 中国大学等へ図書寄贈する「教育・研究図書有効活用プロジェクト」(現日中未来共創プロジェクト) 事業開始
- 2001 年 「海外発表促進助成」事業開始  
水域環境をめぐる学習活動等の成果公開支援 (2005年まで)
- 2006 年 「研究船で海を学ぼう」事業開始 (2010年まで)
- 2007 年 体感型実験装置群を開発し、全国的な科学・巡回展示を開始 (2013年まで)
- 2012 年 内閣府の公益認定を受け「公益財団法人日本科学協会」と改称
- 2013 年 体感型実験装置群 (台風がやってきた!) を台湾科学工藝博物館 (高雄市) に寄贈  
「サイエンスメンター制度 (現高校生のためのサイエンスメンタープログラム)」開始  
「立方体地球」出前授業開始
- 2014 年 体感型実験装置群 (光の謎を解き明かせ!) を防府市青少年科学館ソラールに譲渡
- 2015 年 生命科学テキスト「人間の生命科学」制作開始 (2017年第1版完成)
- 2016 年 「科学隣接領域の研究」事業開始 (2021年まで)
- 2017 年 笹川科学研究助成事業 30周年
- 2019 年 「研究成果発表会」開催 (9月)

### 日本科学協会 役員等

(2021年12月31日現在)

会 長	高橋 正征	東京大学 名誉教授 / 高知大学 名誉教授
常務理事	石倉 康弘	公益財団法人日本科学協会 常務理事
	顧 文君	公益財団法人日本科学協会 常務理事
理 事	川口 春馬	慶應義塾大学 名誉教授
	木村 龍治	東京大学 名誉教授
	和崎 春日	中部大学 名誉教授
		京都精華大学アフリカ・アジア現代文化研究センター 客員教授
	室伏きみ子	お茶の水女子大学 名誉教授
	渡邊雄一郎	東京大学大学院総合文化研究科生命環境科学系 教授
監 事	菅井 明則	公益財団法人笹川平和財団 常務理事
	馬目 利昭	馬目公認会計士事務所 代表
評 議 員	門野 泉	公益財団法人東京財団政策研究所 理事長 清泉女子大学 名誉教授
	西原 祥子	創価大学糖鎖生命システム融合研究所 所長・教授
	前田 晃	公益財団法人日本財団 専務理事
	前野 隆司	慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科 教授
	境 浩光	株式会社科学新聞社 代表取締役
	竹本 和彦	一般社団法人海外環境協力センター 理事長 東京大学未来ビジョン研究センター 特任教授
	中村 和生	北里大学 名誉教授
	山崎 壮	実践女子大学生生活科学部食生活科学科 教授

### 笹川科学研究助成に係る委員会

企画委員会	1988年～1990年	(委員長) 豊田 弘道
事業委員会	1991年～1999年	(委員長) 膳 昭之助
	2000年～2012年	(委員長) 膳 昭之助・(副委員長) 高橋 正征
	2013年～	(委員長) 高橋 正征
	* 1990年度からは、選考委員会を設置し審査選考	

## 20th Anniversary of Overseas Presentation Promotion Grant of Alumni of the Sasakawa Research Grant for Young Scientists (Summary)

The Japan Science Society has been promoting the Sasakawa Scientific Research Grant Program to support young researchers since 1988 and started an overseas presentation promotion subsidy project in 2001 according to the strong request of many researchers who received the grant. There are 100 to 150 grant applications each year, and we have supported 1,335 so far. The acceptance rate was about 50%, and the total amount of grant was about 250 million yen.

This program is intended for alumni of Sasakawa Scientific Research Grants residing in Japan who are scheduled to make presentations at overseas research conferences. When subsidizing, priority is given to young researchers who have difficulty in obtaining travel expenses and participation fees and those who receive this support for the first time. Initially, recruitment was once a year, so it was not possible to make presentations at research conferences held at the beginning of the April-May fiscal year and at the end of the February-March fiscal year. From 2004, we changed the recruitment to be divided into four periods (April-June, July-September, October-December, January-March) so that applications can be made throughout the year. It is necessary to allocate the necessary budget to each period, and at the beginning of the year, the schedule of research presentations was investigated and allocated by questionnaire to alumni at each period, but from 2015, the past 3 years based on the number of applications, we predict the number of applications for the relevant year and decide the budget allocation for each period. This makes it possible to apply at any time of the year, except for research conferences that span the year. The subsidy is about 80% of the total required travel expenses (international airfare / accommodation expenses) and participation fee, and the average is about 200,000 yen. The maximum amount of subsidy is about 300,000 yen. Eighty to ninety percent of the adopters are those who receive this grant for the first time, but there are also those who have been adopted multiple times. The assignments presented at the research conference do not have to be related to the assignments when receiving the Sasakawa Scientific Research Grant. From 2019, we started accepting applications by electronic filing using e-mail.

Due to the COVID-19 epidemic, some of the overseas research conferences have taken advantage of recent advances in internet technology to adopt the new style of holding the event online, and from 2020, we have hurriedly supported them. It is expected that the number of online international research conferences will increase in the future, and we will support both in-person and online. Online conferences do not require travel expenses, transportation costs, or travel time, so the hurdles for participation are low, however, if someone actually goes to the site and participates in the research conference, he or she will be able to experience not only the research aspect but also to feel the research environment and lifestyle of that country, which will be useful for realizing joint research with overseas researchers. Therefore, we will continue to encourage in-person research presentations.

(Translation : Benjamin Martin)

**海外発表促進助成  
研究は海を越え、20年の軌跡**

発行 2022年3月  
公益財団法人 日本科学協会  
〒105-0052  
東京都港区赤坂 1-2-2 日本財団ビル 5階  
TEL : 03(6229)5360(代表) FAX : 03(6229)5369  
<https://www.jss.or.jp>

本書の無断転載、複写、複製を禁じます。

本書は、ポートルースの交付金による日本財団の助成を受けて日本科学協会が発行したものです。

